

道南女性史研究

第八号



表紙
題字

武藤
富子
星眠

はじめに

一九九一（平成三）年を迎え、世界中が平和でありますようにと思わずにいられない。

昨年八月のイラクのクウェート侵攻に始まる湾岸危機は、国連を中心とした最後の調停工作も失敗し、ついには一月十七日、アメリカを中心とした多国籍軍はイラク攻撃を開始した。そして現在、戦争は長期化の様相を呈し、日本政府は戦争反対の国民の声に応えることなくアメリカ追隨に終始している。何という事か……。

私たちは今号『道南女性史研究 第八号』も「戦争」を統一テーマとした。今号も体験や聞き書きの中で、四六年前に終わったはずの戦争、その戦争の傷が決して過去のものでなく、今なお続く根深いものであることをあらためて思い知らされているのに。戦争には絶対反対である。

今回は特に、一九二五（大正一四）年日本の植民地支配下の母国に生まれた尹ユン 貞玉ジョンオクさんの原稿を戴くことができた。権力を笠に着た人間がいかにもにくい、八才だった子供の印象は強烈である。昨一九九〇年の正月特集として韓国有力紙に掲載された記事も私たちに對する告発とうけとめたい。海部総理が言葉で深謝しただけはすまない、私たち日本人一人一人にかかわってくる問いかけであろう。

今号も拙い記録集ではあるがじっくりと読んで戴きたく思います。

最後にご協力下さった多くの方々に感謝し、合せて『第八号』のご批評とご叱正をお願い致します。

一九九一年一月

道南女性史研究会会員一同

目次

はじめに

一、特別寄稿

・私の八才と六五才……………尹 貞玉 1
 ・集団投身した崖は「自殺の名所」に……………尹 貞玉 8

・四五年目の再会……………太田垣 成子 14

二、聞き書き

・光は見えずとも……………作山 すみ子 21

・陸軍病院の思い出……………宮川ワサさん……………伊原 祐子 32

・遠い故郷・択捉島墓参……………河口キワさん・押野久子さん……………酒井 嘉子 38

・私の半生……………結婚・外地カラフトの思い出……………四ツ柳 敦子 49

・異国で生きた四十年……………大場 小夜子 63

三、体験記

・歴史のかげで……………ある娘のはなし……………田尻 聡子 70

四、回想

・行啓通り 今昔(その二)……………佐藤 恒子 79

あとがき……………88

住所録……………89

一、特別寄稿

私の八才と六五才

私は一九二五年の九月、金剛山（注1）で生まれました。正確な住所は江原道高城郡外金剛面温井里でした。万物相と言われる連峰の裾にある温井の村で、神溪寺も二里の距離であったと覚えていません。

私の家は寒霞溪と呼ばれる川の岸にあつて、川向こうに温井里尋常小学校の建物と運動場が見えました。

日本の政府は三十戸の日本人子弟のためには学校を建てましたが、三百余戸に達する朝鮮人のためには学校を建てませんでした。それで私の父が建てましたが、それは村はずれにありました。私の家からは約十五分の距離にありました。父が建てた朝鮮人学校の名称は金剛学院でした。何故、学校と呼ばれなかったかと言うと、日本

当局が村の朝鮮人のための教育機関は四年制に限定し教員も一人以上採用することを禁じて、一段階劣つた機関として許可したからです。

教育を重要視した父は自分の土地を温井里小学校に寄付して兄や姉を小学校に入学させました。父が学院長である学校の教育ではその時のソウルにある高等学校に入れなかったからでした。

私が八才になつた早春のある日、私は父の手に引かれて入学試験である口頭試験を受けるために小学校のうす暗い教員室に入りました。日本人には義務教育が実施されていましたが、朝鮮人は教育税を出さないと理由で入学試験を受け選ばれていました。入学後も、毎月

尹^{ユン}

貞^{ジョン}

玉^{オク}

授業料を出さねばなりませんでした。

試験官は校長先生でした。彼は私を大きな椅子に座らせ、私のそばでやさしい顔をし、優しい声で

「名前は何ですか」と聞きました。

私はその時初めて校長先生のそんな顔を見、声を聞きました。それはその時まで私が知っていた校長先生とはあまりにも違っておりました。

——小さい村で毎年秋に開かれる小学校の運動会は祝祭のような行事で、駐在所の所長岡本さんや、郵便局の局長桂さんをはじめ長箭や高城からも「偉い」方々が参観にきました。村の子供たちと一緒に、私はいつも運動会を見物に行きました。短距離や長距離競争の時、朝鮮人の子供が一番にテープを切っても二番目の日本人の子供の手をつかんで、

「一等」と声高く叫んだ校長先生でした。この行事では毎年同じ様な審判が繰り返されました。

運動会だけでなく学校の成績もそういうやり方で決められました。私の姉は、梨花女子専門学校を卒業する時開校以来最高の総点（成績）で、その時の朝鮮総督（日本人の陸軍大将だった）が銀メダルを授与した位でした

が、その姉がこの村の小学校に通っていた時、試験の成績はいつも一等でしたが学校の席次は毎学期二等でした。朝鮮人は一等になれないとの事でした。——

さて、口頭試問の時、校長先生のやさしい顔と声を、聞きながら、もう一つの場面が目には浮かびました。

——村の一人が禁止区域である山で薪にするために木を伐り、それが日本人の山林監視人に見つかったのです。その人は脱腸するまでたたかれた後、脱穀所の前に投げ捨てられました。私は村の人々と一緒にこの光景を見ました。——

「何才ですか」

「お父さんのお名前は」と質問は続きましたが、私は校長先生が猫をかぶっているとしか思えませんでした。はじめは意識的でなく本能的に校長先生の仮面を拒否しましたが、質問が続くに従ってその「偉い」日本人に反抗することになりました。そして最後まで一言も返事をしなかったのです。

五日位あとでした。郵便物が届き私の落第を知らせましたが、通知書には、ただし書きがついていました。小学校の運動場に面している父所有の丘を寄付すれば、私

の入学を再考する余地があるとのことでした。両親は寄付をするかしないかで争いました。母は日本人の横暴はきりがないと寄付に反対し、父は私の将来のソウル留学を考へて怪しからんけれども小学校に入学させる外方法がないとの主張でした。その時は母の意見が通つてその一年は父の学院に通い、翌年九才の時からソウルの伯父の家からソウルの学校に通学しました。

日本は大陸侵略を具体化するにつれて朝鮮半島を兵站基地に変へて行きました。

朝鮮人民に対する搾取と抑圧、そして精神的隷属化政策を強めて行きました。穀物を供出させ、満州から搬入した馬の食糧である豆粕を食わせ、祖先の祭りに使う祭器や結婚指輪に至るまで、あらゆる弾丸材料を奪ひ、一九三九年には日本式創氏改名民事令を公布し、一九四一年からは国民徴用令を強化し、人力を強制的に動員しました。

何よりも恐ろしかったのが「処女狩り」と呼ばれた挺身隊動員でした。一九三七年頃から始まったこの動員は一九四三〜四年に至つては、十五才の娘から三〇才を越

えた子持ちの母親まで見つけ次第トラックに乗せて走り去つて行きました。私は今も、地獄はどこか別の空間にあるのでなく人間関係にあるのだと信じています。

美を越えて聖なる感へまで与えた外金剛山の裾で、私は日本人の不条理な教育態度と非人間的な残忍さを目前で見て、憎しみを抱くようになりました。私は物が分かる様になるにつれて、日本を呪詛するようになりませんでした。この感情は日本政府だけにでなく日本人個人に対してもそうでした。

この様な感情は戦後も続きました。しかし、この感情は変わり始めました。それは一九八〇年の冬、私が従軍慰安婦問題で踏査を始めた(注2)時からです。本州の大都市や北海道、九州、沖縄に至るまで、多くの日本人々に会う機会がありました。国家を代表する政府とその国民は必ずしも一致するものでない事を知つておりましたが、実際の経験を通してこのことを分かるようになりました。日本人に対する私の感情は変わり始めたのです。

今、私は皆様と一つの問題に関して共に考えたいと思います。

昨年の五月、韓国の盧大統領が訪日した際、海部首相は韓国に対して心深い謝罪をし、特に戦中日本が犯した加害の罪に対し償い、両国の親善のため最善を尽くす事を公言しました。しかし、六月六日の参議院予算委員会で政府側の答弁に出た清水伝雄氏は従軍慰安婦は民間の業者が行なったことなので政府としては調査が出来かねると（注3）述べております。



—尹 貞玉さん—

今日アジア全域で行われている日本男性のセックス・ハンティングとアジア女性の「ジャパゆき」は戦中行われた慰安婦の問題が隠され埋もれたままであるからではないでしょうか。アジアで買春観光が盛行する限り、又「ジャバゆき」で日本内で売春が強制される限り、日

本の女性も加害者であると同時に被害者ではないでしょうか。

日本は今

過去とは違って経済力でア

ジア諸国を侵略していると思えます。それで、日本の男性はセックス・ハンティングで支配者たるを見せびらし支配者たるを自身に確認させ満足するのではないのでしょうか。このような日本男性を黙認するかぎり国際関係において日本女性も加害者ではないでしょうか。男女の問題においては、日本女性が日本男性の被害者であります

が……
従軍慰安婦の問題は戦争犯罪に関する問題でもありませんから、日本政府としては事実を認めることが難しいと思います。けれども、この糾明と犠牲者に対する賠償なしに日本が過去から解放されることは難しいのではないのでしょうか。さらに、アジアにおける売春観光と「ジャパゆき」も続くのではないのでしょうか。

私は過去の憎悪心をなくして、心から日本の女性と共に従軍慰安婦の問題にとりくみたいと皆様に呼びかけたいと思います。

(注1) 金剛山は現在、朝鮮民主主義人民共和国の南東部、太白山脈の北部にある山。海拔一六三八メートル。鋭峰が林立し、朝鮮仏教の霊地で神溪寺などの巨刹がある。

(注2) 尹さんの踏査地は九州、沖縄、北海道、タイ、パプアニューギニアで、尹さんの会った方は、沖縄で裴奉奇ハルモニとタイのハツチャイで盧寿福ハルモニのお二人である。なお、尹さんによれば朝鮮から連行された慰安婦の数は一〇万から二〇万人と言われる。

(注3) 参議院予算委員会会議録第十九号 平成二年六月六日の本岡昭次氏の質疑と政府委員(清水伝雄氏)の答弁参照。なお質疑の中で本岡氏は日本軍への従軍慰安婦数七、八万人とのべている。

尹 貞 玉 さんについて

尹さん自身が書かれた履歴から紹介させていただく。

一九二五年九月二一日 出生

一九三九年四月 京畿公立高等女学校入学

一九四三年三月 同校卒業

一九四三年四月 梨花女子専門学校家政科入学

一九四五年一〇月 同校文科入学

一九四七年四月 同校、梨花女子大学校に昇格、

本人は同校英文科に編入

一九四九年七月 同校同科卒業

(以降数回にわたり米国留学)

一九五八年四月から現在まで梨花女子大学校英語英文

科教授

尹さんと私たち女性史研究会とのかかわりは、一九八八年八月十二日、メンバーの一人(田尻)が函館YWC

Aで尹さんにお会いした時に始まる。『道南女性史研究』(第六号)「ムクゲの花咲く故郷」―二話 皇軍慰安所―参照)

ソウルの梨花女子大の先生で朝鮮人従軍慰安婦調査で来函された尹さんの話は、同世代であり満州にこだわりの続けている彼女を感動させ、手紙のやりとりが始まったという。

昨年の春、尹さんからの便りに入っていたと私たちはハンブル語で書かれた一九九〇年一月四日付け新聞を紹介された。ハンギョレ新聞(注1)新年特集に掲載された尹さんの記事であった。

北海道の地図が記されており多分函館だろう、地名も書き込まれていたので、正確に読みたいと思ひ、北大水産学部留学生(権さんと李さん)のご協力で翻訳してもらひ、尹さんの許可と監修を得てここに(8ページから)全文掲載するのが―集団投身した崖は「自殺の名所」に―である。(この題名は、ハンギョレ新聞に記されていた見出しをそのまま引用)

立待岬で朝鮮人の若い女の人が飛び込み自殺したという言い伝えは私たちも聞いていたし、その事実を知って

いる朝鮮人の婦人を捜していた時でもあったので(注2)興味深く読ませてもらったが、尹さんの文でもこの部分はおお風聞の域を出ていないと思われる。

この新聞記事を読み合った私たちは日本の植民地支配下で成長されたであろう尹さんご自身の事も知りたいたい、田尻を通じてお願いし書いてもらったのが前記の「私の八才と六五才」である。

はるばるソウルから送られて来た達者な日本語の原稿に私たちはビックリした。この驚きは、昨年十二月、来函の折(注3)、私たち女性史のメンバーが尹さんにお会いして倍加した。日本語を非常に巧みに話されたのである。尹さんは、一九四五年八月、朝鮮半島が日本の植民地支配から解放されてからは日本語を書くことも話すこともしなかった、むしろ意識的に使う事を避けていたと話され、「二〇才まで戦前の日本語教育をうけたからです」と明快にいわれた。

尹さんを囲む会は、約束の時間を超過して弾んだがその事は又の機会にして、気持よく原稿をお寄せ下さった尹さんに心よりお礼申し上げて紹介文とさせていただく。

(文責 酒井 嘉子)



尹さんを囲む女性史のメンバー
—1990.12.10—

(注1) ハンギョレは一つの民族と大きな民族という意味を共に持つ。この新聞はソウルで発行され、韓国五大新聞の一つである。比較的進歩的で、知識人層と大学生や青年達が主な読者であって、盧政権の出発同時聴問会の進行中、与野両党の議員

等がもつとも多く引用した新聞である（尹さんの説明による）

(注2) 『北海道の平和と教育—平和教育実践記録集 9巻』（一九八八年十一月）の中で、北海道に日朝鮮人の人権を守る会の山本玉樹氏は、立待岬の波の音は、戦時中だまされて来函し、慰安婦を強要され、集団投身入水した若い朝鮮の女性達のお母さん！お母さん！と叫ぶ声に聞こえるのですと朝鮮人の古老から聞いたと報告している。

(注3) 東京の女性グループの招きで来日し、一九九〇年一二月一日、『従軍慰安婦問題をめぐって』と題した講演をされた尹さんは九日、函館YWCAでも同主旨の話をされた。私たちが囲む会を持つことができたのは、その翌日である。骨折っていた池田晴男氏にこの場をかりてお礼申し上げます。

集団投身した崖は“自殺の名所”に

一九九〇年一月四日付

ハンギョレ新聞 新年特集から一

筆者のコトバ

筆者が挺身隊の足跡を探して彼女たちの悲惨な過去をつきとめようとするには私なりの理由がある。

一九四四年十二月、私が梨花女子専門学校一年生の時日本帝国主義が朝鮮半島各地で結婚していかない若い女性たちを強制的に挺身隊につれていくという恐ろしいことが起こった。多くの学生達が結婚のため学校をやめたが、慌てた学校当局は“学校が責任をもってあなた達には絶対にそんな事はさせない”と公言した。しかし、その後すぐ、我々は国民総動員令に応じるといふ誓約書に指紋

押捺しなければならなかった。

私は両親の勧告に従って学校をやめたので挺身隊は免れた。しかしその頃、私と同年齢ぐらいの処女たちが日本帝国主義によって引つ張られていた。二〇世紀に起きたこのような恐ろしい事が、もしかしたら二一世紀になつて第二次世界大戦さえ聞いた事がない世代に起こりうる事を考えると恐ろしい思いに耐えない。

私はこの事は忘れてはならないし、歴史的に整理しなければならぬと思う。そしてみんなに自覚させるべきであるという信念からこの仕事を始めることになった。

筆者は、日本が我国の若い女性を何故、どの様にしてどの位、連れて行ったか、又、どんな事をやったのか、

신한 질벽은 '자살의 명소'로

북한 30만 인원이 '정신대' 원혼 서린 발자취 취재기

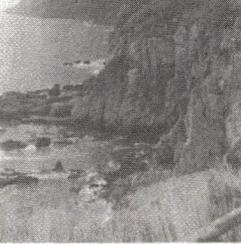
北 報道

1 홋카이도

인의 발을 밟고 한 무릎을 꿇을 때를 건너 홋카이도의 하코다에 아사히 오라부리군에 도착했고 또 한 무릎을 꿇어 탄을 건너 오사카 방역공장을 직행이 되었다. 그러나 이곳은 저속 깊은 오사카 방역공장을 벗어나니라니 또 다시 속아서 예순공로 배적하게 되었다.



이성들을 찢는 기사가 구인공로만을 채우기 시작했다. 모두들은 비마르일 있고 있는 곳을 표시하여 도발한 여성들을 잡기 시작했다.



일제가 강요한 예순을 (2)이다. 또한 수많은 한국 여성들이 발을 건너 자살한 하코다에의 (2)에서는 미사키 들머리 이곳 주민들은 '정신대'가 '정신대'로 불린다고 했다.

개척맨 조선요리집 1백여곳 흥청 1910년대 이미 독일 매춘 강요당해

일본 자기집에 두고 일러려라 못지 못하게 쓰다태신(2)은 '가연은 조선 미인의 죽음' '참모부에서 조선요리집의 변화'라는 데

다테와 마한카리토는 큰 대문이 초당에 있고 그 안에 준비하게 요리집이 서 있었다고 한다. 그래서 지금도 이곳은 '다테부도오리(4대 부도) 먹고 조선요리집'이라 불리는 것을 찾아다니기도 조심하고 있다.

"경찰, 조선너 바꿀 거도"

조선 여성들은 일본 남성들에게 환영을 받았던 흔적이 있다. 1935년 1월27일 <호카이도 > 일일스게 요코야마 "청춘들을 잡기는 조선너, 단교로 백발인 것을 기도, 상모로

—1990년 1월 4日付ハンギョレ新聞—

戰後どうしてこんなに戻って来る人がいないのかの真相を早く見極め、責任を追求する事ができたら、今の様に軍事基地あるいは観光地で外国人相手に売春する韓国女性はその間に多くならなかつたと思う。沖繩やその他の所で日本軍慰安婦だった我国の女性たちが、戦後連合軍慰安婦としてそのまま引き渡された事を知ってからは、この様な思いはもつと切実なものとなつた。

この記事は、一九八〇年十二月、一九八八年二月と八月、そして昨年七月など四回にわたつて日本の北海道、沖繩(注)、タイ、パプアニューギニア即ち我が挺身隊の血涙の痕跡を巡つて、現地の新聞など昔の資料と関係者らの証言を集めて作成した記録である。

(注) 沖繩の那覇の南にある糸満市の平和記念公園には、日本帝国主義時代徴用された韓国の若い人のため韓国当局が建てた墓と慰霊塔があり、塔には李恩祥の挽歌と弔辞が刻まれている。しかし我が民族の凄絶な苦難を背負わされた挺身隊という名の慰安婦については一言の言及さえもない(筆者)。

罪状証拠を隠そうと資料抹消

慰安婦の問題が何故こんなに等閑視されているかの一つの理由は我々が記録を持ってないためであり、もう一つは挺身隊に出た女性がほとんど庶民層出身であり、更に女子であるから男性を主とする社会からそっぽを向かれたためではないかと考えられる。最後に重要な理由は日本が自分達の犯した罪状が現われるのを嫌って持っていた資料を廃棄したばかりではなく、当時将校であった吉田清治氏（著書『私の戦争犯罪―朝鮮人強制連行』）を除いて挺身隊連行に関係した官吏らが絶対に口を開かないためである。

筆者は一昨年八月、二回目に北海道に行った時、そこで会った日本住民と徴用から生き残った韓国男性そして徴用兵の妻（韓国女性）らの証言、当時の記録などを通じて、韓国の若い娘たちが既に一九一〇年頃日本に行き、騙されて日本労働者と韓国労働者を相手に売春を強要されたことが明るみに出た。

日本は開港以後資本主義に移行する過程で資本蓄積に

手段と方法を選ばなかった。江戸時代から始まった北海道開拓、日露戦争で得た利権の沿海州地方の伐木と漁獲、その時代のエネルギーである採炭などに必要な労働力が日本男性だけでは途方もなく足りなくなると、日本は一九一〇年朝鮮を合併し、朝鮮での土地調査、米増産計画と同時に中国を侵略し太平洋戦争を起こし、朝鮮人労働者の日本への入国を厳しく塞いでいた一八九九年勅令を廃止した。

『自治研札幌』（自治労札幌市役所職員組合発行）号外号『内なる国際化を求めて』によると一九三九年の韓国の強制連行者数は日本全域で五二、一二〇名で、一九四五年には一、五一〇、一四二名と記録されている。この時、韓国女性たちが行ったかどうかについての公式記録はない。しかし、北海道開拓受難者調査委員会の会員である堅田精司氏は彼女たちは来ただろうと確信していた。一昨年夏、札幌で会った焼肉屋「新生食堂」の主人である金ダルソン（十六才の時徴用された。慶尚北道尚州出身）氏（六八才）と奈井江の焼肉屋「南大門」の女主人李鍾恵（十九才の時徴用された夫と共に渡日）氏（七〇才）の証言、堅田精司氏の調査、『自治研札幌』と歴史

教育者協議会松前サークルの出版物、「函館YWCAで出会った小学校教師浅利政俊氏の資料等を参考にすると、北海道に連行された韓国女性の状態はおおよそ次の様になっていた。

朝鮮で貧しい生活をしていた韓国女性たちは、日本に行けば腹一杯食べられるし稼げるといふ日本人の甘言を信じて、一部は東海（日本海）を渡って函館か小樽に着し、又、一部は玄界灘を渡って大阪の紡織工場の女工になった。しかし地獄の様な紡織工場から免れようと再び騙されて売春窟に陥おとってしまった。

浅利氏の提供してくれた当時の「函館新聞」「函館日日新聞」などによると一九二〇年大阪紡織工場で働いていた韓国女性が函館に來たとある。一九二一年には女性六名、男子一〇〇名が函館にいた。韓国料理店も一つあった。

韓国女性たちは周旋屋（労働仲介人）に騙されて來ることになるが、周旋屋は彼女らを家に置き仕事を捜せないように外部と遮断し、美味しい物を食べさせ市内見物させた後、多額のお金と交換に遊廓に売り飛ばしたと聞いた。この頃大阪や北海道に行った女性たちは大部分が

十五才から二〇才位であった。売春を強要された多くの女性たちはこの畏からとうてい抜け出ることが出来ない」と判断すると死を選んだ。一人で死んだり集団で死んだりした。

お母オモニさんと泣き叫ぶ波の音

彼女たちが死の道として選んだ所がかって自殺の名所と呼ばれていた立待岬という崖である。

「函館YWCAの紹介で筆者を案内してくれた池田晴男氏と一緒に狭い坂道を通りすぎてついた崖は険しく猛々しかった。太平洋から寄せて來る波が碎ける崖下には波にひつかかれた岩が散らばっていた。その崖から落ちると生き残る道はないように見えた。この町の人々にはこの崖から碎ける波の音がオモニー、オモニーと泣き叫ぶ音の様に聞こえると池田氏は伝えてくれた。

浅利氏が見せてくれた一九二三年十二月十八日付「函館新聞」には可哀想な朝鮮美人の死、十七才という記事があった。ここで死んだ韓国女性に関する記事は多かった。新聞には日本人たちの酷い虐待に耐えられなくて抗

議した女人たちが裸にされて追い出されたという記事もあった。一九三五年六月二〇日付には午前二時頃髪の毛が乱れ、半裸の女人が町を放浪しているのを巡査が発見という記事も見える。李バンスウ（二〇才）というこの女性は「鄭トクスウ」という料理店にいたがろくに食べない状態で、病気になったが、薬も買えなくて精神錯乱を起こしたのであった。

韓国女性の自殺報道禁止令

一九四一年日本は太平洋戦争を起こし、韓国の若い男女をより多く連れ去って行った。この中で多くの女性達が続けて自殺し、新聞はこの事実を報道し続けた。

ついに一九四三年日本当局は韓国女性の自殺記事について禁止令を出した。これより先、一九四〇年からは無断家出した女性を捜す記事が求人広告欄を埋め始めた。

女衞^{せびん}たちは髪の毛の様子、着ている服などを描いて逃げた女性を捜し始めた。

一九四〇年一月七日付「小樽新聞」には次のような内容が見える。

夕張炭坑には七〇四名の朝鮮人坑夫がいた。遠い異郷で国策産業に勤めているこれらの戦士たちを慰安するため、前々から準備をしていた朝鮮郷土料理店三棟を新たに「協和寮」付近で開設することにしたという。前述の『内なる国際化を求めて』三八ページにある、「札幌での朝鮮料理店の変化」という題目を見ると、一九二〇年代に初めから朝鮮労働者相手の慰安婦を置いた朝鮮料理店が開設されたという。この記録には、日本女性には実施された公娼制度を韓国女性には適用しなかつたので登録さえされなかつた事を明らかにしている。売春を強要された韓国女性が人権、賃金、衛生などの厚生面等から何の保護も受けられなかったという事を語っている。

一九三〇年に入ってから異常が起こった。本来、札幌の朝鮮料理店は朝鮮労働者のために五、六軒建てられた筈なのに日本男性が韓国女性を好んで来たので、日本人相手の料理店に変わってしまった。一九三五年頃の警察発表によるとこの様な店が六七軒あるとしているが実際には一〇〇軒を越えていただろうと記されていた。働いている女性は函館か小樽から来た女性で日本語が上手かつたという。しかし、朝鮮の人に対しては絶対日本語を話

さなかつたと。

韓国女性のいる料理店が集まっているのは豊平という町に限定され、函館と同じように大きな門が入口にあって、その中に料理店は整然と並んでいたという。今でもそこは大門通りと呼ばれ、朝鮮料理店が集まっていた所を大門の朝鮮バーと呼んでいたという。

警察、朝鮮女性撲滅企る

朝鮮女性は日本男性に歓迎された痕跡が濃い。一九三五年一月二七日付「北海タイムズ」によると、「青年層を蝕む朝鮮女断固撲滅を、札幌警察強硬態度」という題目の記事があった。

このように日本当局は韓国女性が何故そこにいるかを問わずに監視を強化した。日本は戦争を拡大しながら、日本にいる韓国の人々に対して韓国的要素を撲滅しようとした。札幌の韓国料理店の名前も、トラジとかアリランというような韓国的なものを使えない様にし、韓国女性が着ていたチマやチョゴリをも強制的に日本服に替えさせるようにした。

堅田氏や浅利氏は北海道開拓の歴史を編集している内に韓国労働者の悲惨な資料が続々出て来て、今では韓国人徴用関係と売春状況についての専門家になったという。彼らは、丘珠飛行場の地下には、韓国人の死体が数かれ、鉄道の枕木一つ一つが韓国の徴用夫と考えてもいいと言った。そして、立待岬に碎ける波の音を韓国女性の怨魂の音として聞くしかない函館の人たちは北海道開拓に数え切れないほど多くの韓国の男女が犠牲になったことを記憶していた。

(付記)

ハンギョレ新聞 新年特集からのこの記事は北大水産学部留学生の権 燦枢氏と李 海鷗氏に翻訳をお願いし、のち尹先生に目を通していただいたものを全文掲載しました。

道南女性史研究会

四五年目の再会

金さんを迎えて

一九九〇年九月四日午後三時、同年代の女性十数人が千歳空港に集まった。四五年ぶりに再会する金さんキム(注)を迎えるためだった。既に金さんは、サハリンからハバロフスク経由で九月三日、新潟に到着している。

七月函館空港の「道民の翼」でサハリンを訪問し、ユジノサハリンスクで金さんに会った友人の一人が新潟まで出迎えに行っている。

三時三〇分時刻の到着、心臓の鼓動と胸が熱く涙が滲んだ。笑顔の黒いワンピース姿が見えた時、殆ど変わっ

ていない面影に四五年の歲月も、遠かったサハリンも、一瞬私の脳裡から消え去ってしまう程だった。

美しい笑顔の金さんを目の前にした私は長い間、叫ぶ程詫びてきた心もほっとした気持ちで言葉もなかった。

(注) キムオクズ 金玉順さん。太田垣さんの樺太、塔路小学校、

真岡高等女学校時代の同期生。彼女は『道南女性史研究』(第七号)『私の上ノ国、樺太』で金さんのことに触れている。

十年程前から金さんの消息がわかり、友人との文通が始まった。一九八九年十二月三〇日、女学校時代級長だっ

たAさん（札幌在住）あてに是非同期会に出席し、皆さんにお会いしたいので手続きをお願いしたいと金さんから手紙が届いた。

Aさんは早速同期会役員会を開き、金さんの希望を叶えるべく再三話し合い、招待することに決定した。Aさんが身元引き受け人となり手続きに取りかかった。外務省、ソビエト領事館、Aさんの戸籍抄本数通作成、預貯金金額の提示、日程決定のための金さんとの打ち合わせの音信が交わされた。（往復に二ヶ月もかかった）

旅費（新潟往復）や、滞在期間の経費等目途がつき、最終決定まで八ヶ月かかったという。

ところが千歳空港から札幌のホテル（五泊予約）に着くと金さんから帰国を十四日まで延長して欲しいとの申し出があった。Aさんはじめまわりの人にかくし切れない動揺が見られたが、ただちに手分けし、交渉の結果金さんの希望を生かすことができた。延長の四日間について金さんは札幌で買物をしたいと希望したので交替で付き合うことになった。私は金さんの滞在中在札する事にしていたので行動を共にすることになった。

五日はAさん宅で数人の友人と共に食事。豆腐のみそ

汁や納豆のご飯がおいしいと嬉しそうだった。Aさん宅への往復の地下鉄に彼女は驚くばかりだった。

六日は塔路小学校の同級会。突然の集まりだったのに二〇数名が立派な会を開いてくれた。私も初めて参加、五〇年ぶりであった。会では十数万円のカンパが集まり金さんに渡された。

八日の女学校・中学校の同期会には六〇人程集まった。塔路の会でもそうだが、同期というだけで知らない男性（当時は男女別学で男子は中学校、女子は女学校）まで應ずることなく会を盛り上げてくれ金さんを歓迎することが出来たと思う。

金さんは席上、次の様に挨拶した。

この度、真岡中学・真岡女学校の同期会の方々のお力によって私は夢にも思わなかった札幌へ訪問できました。着いて六日目、あまりびっくりして未だによく眠れません。みなさんの中でTさんやOさん方がサハリンへいらしたからよくおわかりのことと思いますけれど、私は何だか竜宮城に来ているみたいです。こういう立派なところに来たこともあり皆さんのでもう茫然としています。



—金さんをお交えて—
右端金さん、左から二人目筆者

私の住んでいるサハリンも今はペレストロイカの波が次々と来て、又これから自由経済へ移行するの
で今が大変なところなんです。これからどうなるかわかりませんが、明るい見通しを希望して生きております。

こちら
へ来てみ
て戦後四
五年の間
に皆さん
がどれ程
努力して
この経済
大国日本
を建設し
たか、そ
れは戦中
派のあな
たのお力
だと

思つて尊敬しております。皆さん本当にご苦労様でした。

今度サハリンにいらっしゃる時は前もつて私に連絡して下さい、どうか、故郷である以上は物資不足とか、そういうことはお考えにならずに遊びにいらして下さい。それからこの度、私がくることについては元の級長のAさんその外沢山の皆さんの努力でこうして来られました。私は豊原でも有名人の中に入つておるんですよ。招待されて同窓会に出席するのは私をはじめで女性の第一号です。むこうでは私の友人達がいろいろなおみやげ話を聞く気になつて待つております。私はサハリンの皆さんに鼻が高いのですよ。本当にありがとうございます。ありがとうございます。

きちんとした日本語の、立派な挨拶だった。四五年間サハリンで日常はロシア語、たまに母国語である朝鮮語という生活のなかで日本の言葉は殆ど耳にすることも口にすることもなかったという金さんの挨拶に友人たちは皆、領き、感動した。

金さんとの八日間

ところで金さんの突然の帰国変更には、私たちの心に疑問と不信が生まれた。順調に來れたはずなのにハバロフスクで二泊したこと、持ってきた大きなバックの中に韓国に持っていくたい物が入っているなど時間の経過について知らされた。日延べ変更とはどういうことだろう。それでも友人は忙しい中にもホテルに寿司やいろいろな食べものを持って精いっぱい金さんをもてなそうとした。しかし金さんは私たちはお金持ちでみんな豊かな生活をしていると思ひ込み、誠意も余り通じなかつたようだ。友人がホテルにアイロンを持参し、貸して上げた時、二三日して返して貰おうとしたら「あなたの家にアイロン一台しかないの？」とか、私と狸小路を歩いて果物店で食べたい果物をきくと「みんな食べたいけれど今はあれを食べたい」と四個入りの桃のバックを指した。私は一六〇〇円支払った。ホテルに帰って早速食べながら私にも勧めた。「私はいつでも食べられるから」と断わつた。「あなた達はいつでもたべられていいね」と羨んだ。

しかし、私は四個で一六〇〇円もする桃など買ったことも食べた事もない。「日本の国のあなた方はいいね、誰れか私を半年位貰つてくれる人はいないだろうか」とか「どの店も、あんなにいっぱい並べてあるのにどうしてみんな並ばないのかしら」などと言つていた。

日本の国は金持ちで、豊かなように見え、たしかに、どの家も立派な冷蔵庫、テレビ、家具など物はあるけれど、自殺する人や、一家心中のあることを話したが、金さんには理解出来なかつたようだ。

金さんは、家具を買うため飛行機で八時間もかかつてモスクワまでも行つてきたと話していたが、遠い国のことだと思つた。

金さんの家族は強制連行で樺太に行ったのではないことを知らされた。だから当時少ない女学校への進学もできたし、戦争中もあまり苦勞はなかつたと聞き、ホツとした。しかし金さんの戦後は大変なことだつたと思う。両親、そして姉の死、姉妹三人が残された。結婚も最初の夫とは五年位で離婚し、男児を引き取り育てたが病弱だつたため、北朝鮮まで漢方薬を買いに行ったこともあつたという。

金さんは、早期にソ連国籍を取った（韓国籍では、サハリンから出ることが出来なかった）。それは金さんの英知と機敏な生活力の中で選択されたのだろう。再婚し、三女をもうけた。先夫との長男はモスクワ大学を卒業後病死した。長女次女は結婚、三女は独身でユジノサハリンスクの博物館（当時の豊原博物館）に勤め、日本からの訪問者の案内役もしているとのこと、二人の妹、そして娘達も幸せだという。金さん自身も国営の洋裁店で働いていたので二〇〇ルーブルの年金（筆者注）で不自由のない生活の様子、自分で作ったステキな洋服を何着も持参していたので私たちが金さんにあげようとした衣類は不要となった。

しかしそんな金さんも一九八八年夫の死という不幸に見舞われ、今は、三女とアパルトにすんでいるとのこと、アパルトも医療も無料と、社会主義の国の良さの一面を聞かされた。

一九八九年、金さんは夫の一周忌に夫の妹たちが住む韓国、オリンピック後の韓国に墓参に行っている。（朝鮮、韓国問題に取り組んでいる東京の弁護士との援助で実現したようだ）

十日になって、金さんは急に十二日韓国へ行くと言った。札幌在住の同胞の男性を通して韓国領事館で手続きをし、千歳発韓国直行便で行くことが知らされた。再度の変更には友人達の中には「やっぱり」とか「どうして最初に言ってくれなかったのか」とか怒りをあらわす者も出てきた。友人たちに足並みの乱れが生じた。私は手続きをしてくれた男性と共に領事館まで同行した。韓国にいる夫の妹の生活が苦しく金さんの行くのを待っていると訴えたようだ。領事館の婦り狸小路で買物をした。サハリンでは買えないといって十数足の靴を買い込んだ。

級長のAさんは予定が早くなった事を知らず旭川に行っていたので私と他の二人が千歳まで送ることにした。迎えた時の十数人が三人になってしまっただけで寂しさで胸がいっぱいになった。涙がでる。「金さん、おたがい元気かいよね、そしてまた会おうね」。涙の中で私は無事を祈った。本当の金さんの心は知ることにはできない、招待してほしいと便りがあった時、既に韓国行きを考えてのことだったかもしれない。東京の弁護士には、サハリンには韓国や朝鮮に行きたい人がまだまだ沢山いるので同じ人が再度ということではできないと言われていたらしい。

戦後一度も行かない人は想像し、夢見ているだろう。しかし、金さんのように一度行った人は一層思いが募るのかもしれない。

(筆者注)

ソ連平均月賃金は労働者や事務員は二一七ルーブル、コルホーズ員(集団農業)は一七八ルーブルである。現在ソ連には月収八八ルーブル以下の労働者六〇〇万人、月、七四ルーブル以下の年金生活者三万五〇〇〇人である。

サハリン一時帰国者激励会にて

金さんを見送った同じ九月十二日夜、サハリン一時帰国者三一名のうち北海道関係十八名の激励会が開かれた。友人の勧めで私も参加した。ズック靴をはき、手を引かれてきた人もいた。みんなうつむいている。金さんを見てきた私は余りの違いに茫然とした。胸がいっぱいになった。自己紹介に自分の名前も言えない程みんな泣いて団長さんが代わって言っていた。四五年間どんなにか祖国に思いを馳せて生きてきたことが。

サハリン残留邦人の親さがしに樺太(サハリン)同胞一時帰国促進の会(民間団体)が協力し、呼びかけたことよって三一名が帰国できた。三六名が一時帰国を希望したのだが受け入れ家族が決まらず五名減ったという。

激励会には二〇〇名近く参加していた。道知事も札幌市長の挨拶も司会者の代弁だった。その日知事は火傷をして札幌医大で治療しているコンスタンチン君の両親に知事室で握手をしている様子がテレビで放映されていた。忙しいのなら代理の人でもいいから「ごくろう様」と言っただけでよかった。会場でカンパが百万円程集まりましたと報告されたが、コンスタンチン君の見舞金は二十万円程集まっていることを私は新聞で知っていた。一時帰国できなかつた五名の方々を二週間何とかならなかつたのだろうか。

第二次大戦後、ドイツはユダヤ人虐殺で謝罪した。また、日系人強制収容問題で、アメリカ、カナダも反省し、補償に踏み切った。経済大国だといわれている日本は戦後何をしたのだろうか。サハリンに残された韓国や朝鮮の人々は昭和二七年発効のサンフランシスコ平和条約で日

本国籍まで喪失してしまった。戦争責任者は詫びることもせず逝ってしまった。せめて十日前に戦争が終わっていたら、広島・長崎の原爆もなく、サハリンの韓国・朝鮮の人々もこんなことにならなかったのにといつも思うことである。サハリンには、三万五千人以上の韓国・朝鮮の人々が祖国を想い生きている。殆どの人はソ連国籍になっているようだが、そんな中で自由を制限されながらも、多くの一世の人たちは祖国の韓国籍のままでそうだ。

金さんは今更祖国に住もうとは思っていない。子どもたちはロシア語しか知らないし、文化も環境も違う。ソ連では差別もなく、子どもたちのいじめもなかったという。金さんの願っていることは、自分の生まれ故郷へ行ってみたいということだ。四五年間、寒い異国で数々の不幸にみまわれながらも負けずに今の生活があるのは頭の良さに併せ、したたかに生きてきたからかもしれない。それにつけても最近のソビエト情勢には心が重くなる。寒いサハリンで金さんは、朝は夕は何を食べたろうと食事のたびに思う。

帰国した金さんから手紙をいただいた。それによると

九月二九日に韓国から帰り、サハリンは霰あられが降り寒い冬が近づきつつあること、ペレストロイカが進んで、古い生活から新しい生活への過渡期で大変な時だが、追々好ましくなるだろうと希望を持っていること、ただただ戦争さえ起こらなければ他の事は何でもがまんすると書かれていた。そして最後に私のこと忘れないで下さい、なつかしい友よ——と結んでいた。

札幌での八日間、色々な事があつたが、金さんはいい



一権太の小学校時代の金さん—
(後列左から三人目金玉順さん)

思い出して帰国
でき良
かったと
思う。戦
争さえな
ければ—
と私も金
さんと同
じことを
叫ぶ。

二、聞き書き

光はみえずとも

作 山 すみ子

このたびは深堀町にお住まいの小路口キサさんのお話をうかがうことができました。

小路口さんは大正十年十二月十五日生まれの六九才、全盲として生まれ、幾多の悲しみや困難を乗り越えて今は御主人、長男夫婦、お孫さんと暮らしておられます。「人生は波のようなもの」と文中にたとえられているように怒濤のくり返しもあればヒタヒタと岸に打ち寄せるさざ波もあったであろう六九年の軌跡を明るく、時にはユーモアもまじえて話して下さいました。

母の結婚

母ミサの両親、私にとって祖父母は石川県能登から太櫛郡歌棄ビヤ村に入植した。

母は姉二人兄一人の末子として明治三四年十二月二十五日に生まれた。祖父は獣医といっても、免許があつた訳ではないが、もともと器用な人だつたらしく開拓には欠かせない馬や牛の出産に重宝がられていた。入植した時祖父の弟が大野町の農家に養子に入った。

祖母は早く亡くなり、末子である母はほとんど祖父に育てられた。十五才になって祖父が決めた従兄弟と結婚した。祖父は将来末娘の世話になるつもりで奉公に出ている母をある日大野の叔父の家へ連れて行き「決め酒」を交わして母を置いて帰ってしまった。つまり私の母方

の祖父と父方の祖父は兄弟だったのだ。

母は十八才で長女を産んだが、近所の人に赤ん坊の目付きや動作がおかしいと言われたが「まだ赤ん坊だから」と言つて少しも気にせず百五十日も目が見えないという事が分からなかった。次に生まれた次女の私、三番目の長男と続けて全盲だった。三人ともなると誰かに教えられたのか、母自身気がついたのか、お日様に目を向けると普通の赤ん坊はまぶしくて目をつぶるが、うちの子供達はケロッと目をあげたままなので、「あゝこの子は又目が見えないんだ。」と思つた。最初は運命だとか授かりものだから仕方がないと考えていたようだ。

昔の人の言い伝えで何かのタタリだから目のところに墨で目玉をかいて神様に「おはらい」をしてもらったり、着ていた着物を持っていつて祈禱してもらつたらいいと言われると母はもしかしたらという気持ちで三人の子供達をあちこちに連れていった。勿論医者にも行つたが、診るとすぐに「ダメだ、もう見込みがない」と言われた。昔のことなので中絶も出来ず、「あゝ今度生まれる子は目が見えますように」と思い、妊娠した時は流産してくればいいと何回も跳ねたり、わざわざ両手を上にのば

したりした。今なら一人でもそういう子が生まれるともう産まないけれど母は流産もしないで次々と四男三女と七人の子を産んだが、姉と私と第二人が盲目だった。そして姉は十六才、四人の弟も幼児期に妹も十九才で死去し結局私だけが残された。

祖父も父も母も皆んな無知だったと思う。血族結婚がどんな悲劇をうむか誰も知らなかったのだから。

幼い頃のおもいで

父は渡島支庁大野町の土木課に勤務していて、体の大きな人で部下の人夫達から「鬼」と言われていた。だけどとても子煩悩でわたしらにはやさしい父親だった。

小さい弟などはよく背中におんぶしてもらい「おや、電信柱に蟬がとまっている」と近所の人にいわれたぐらゐ大きな人だったようだ。

「お年取り」の晩は子供たち皆んな裏毛ウロモの股引マムシをはいて新しい着物を着た。キンピラゴボウ、煮しめなど料理はすべて母がつくり、中でも「口取り」の羊羹ワガシは今のよゝうに冷蔵庫がないので型に流して外で冷やした。とても

おいしかった、今でも食べたいなと思いますよ。

翌日の元旦は近所の子供たちといろはカルタをやった。父が読むと目の見えない私らは「ハイ！」と大きな声で手に最初に触れた札を取った。このやり方は父が教えてくれたもので、ずっと大きくなるまでカルタに絵がかいてあることも知らなかったし、友だちも別におかしいとも言わなかったのでカルタとはこうして遊ぶものだとばかり思っていた。

いい家庭だった。自分たちが目が見えないという事すら知らなかった。生まれつきなので他の人もみんな同じだと思っていた。ただ近所の友達が朝学校に行くのになどうしてわたしらは行かないのだろうかと思議に思っていた。

父は夜店にも連れていってくれた。夜店のカーバイトの臭いと安いアイスクリームや氷水の味を思い出す。

昭和三年七才の時、父の転勤で大野から函館の五稜郭駅の近くへ越してきた。今は汚くなっているが、日産飼料会社のあつた七重浜へ友達と潮干狩に行ったことがあった。今考えるとずい分遠いと思うけれど、五稜郭駅から歩いていった。海水がひいてヒタヒタぐらいのところへ

入り砂を掘ってアサリをとった。子供だから少ないけれど自分なりに母を喜ばせたいと一生懸命とった。また、川に遊びに行ったとき、はぐれてしまったのか、友だちの声がきこえなくなり名前を呼んでも返事がなかった。そのうち川の水も段々増えてきているような気もし、雨が降ってきて雷も鳴ってビシヨビシヨになり気持も悪いし、心細くてワアワア泣きながら家に帰った。

野菜摘みにも行った。ミツバやセリなど摘むたびに根っこをつぶして臭いをかぐので鼻の下が泥だらけになってみんなに笑われたが、夕食におひたしにして食べ、父が「キサだって役に立つ」と言われ得意になったものだ。

目が見えないということが六才まで分からなかった。目が見えないということが自分だけだということも、他の人との違いも分からなかった。これがあたりまえだと思っていた。目が見えなくて親を恨んだことはない。祖父達の無理解で結婚させられた母をむしる気の毒だと思う。父や母の事を今考えると、これが愛情なのかとか批判もし、間違った教育の仕方だったとおもうけれど、教育のない父や母の素朴な精いっぱい愛情だったのでないかとありがたいことだと受け止めている。

盲 啞 院 時 代

昭和三年大野から函館へ移ったのは、父の上司が盲目の子供が三人もいたので盲学校へ入れた方がよいという配慮もあつたようだ。

翌四年姉が盲学校に入り、次の年私が入った。私は九才になつてゐた。当時盲学校は函館盲啞院(注1)といつて元町(現、公会堂の上)にあつた。母が五稜郭駅まで私達姉妹を送つてくれ、上磯方面から通学してゐた聾生に窓から顔を出してもらい一緒に通学した。函館駅で降り、電車に乗り換えて元町まで行つた。



—昭和11年盲啞院の頃—
(右キサさん)

十一才の時母がチフスになり、大野町の避病院へ入院したので送つてくれる人がいなくて学校を休んでゐた。生まれればかりの弟は大野町の親戚に預けられ

た。

母は三ヶ月程で退院したが、今度は父が急性盲腸炎で手術することになり、退院したばかりの母は赤ん坊の弟を背中にくりつけて父の看病をしたが、母の入院中預けられていた弟はからだが衰弱してゐて、母におんぶされたまま気がつかないうちに死んでゐた。急性肺炎だつた。その後を追うように父も手術して四日目に死んだ。

昭和八年、父は三八才だつた。お骨が二つも並んでしまつてその頃が一番ドン底だつたと思う。ずうつと後になつて「よくキチガイにならなかつたもんだ。」と母が言つてゐた。

それから姉と私は学校の寮に入り、他の小さい子供たちはそれぞれ親戚にあずけられ、一家はバラバラになつてしまつた。母は一人になつて病院の付添いや、旅館の女中などをして働いた。寮に入った私たちは、夏休み、冬休みになつても帰る家がなく、ずい分淋しいおもひをした。それでも当時の院長、佐藤政次郎(在寛)先生の御一家がとても親切に家族の一員のようにかわいがつてくれた。

その頃の盲啞院の勉強は普通の小学校と同じ算数や国

語などを点字で教わった。ただ習字と図画がないだけだった。

その間に親戚に預けられていた弟たちも次々に亡くなり、姉も十六才で、目の見えないすぐ下の弟も盲啞院に入って十五才でそれぞれ亡くなった。みんな肺結核だった。親が貧乏だったから、いいおもいもしないうちに死んで本当にかわいそうだった。私だけが、ただ目がみえないというだけで病氣らしい病氣もしないで残された。

六年間小学校と同じ勉強をした後、四年間は中等部針按科といって中学校の勉強の他に、マッサージやハリ、灸を習って卒業となるのだが、私は卒業の一年前に寮を出て住み込みで働き、午後だけ学校に通った。今でいうアルバイトをした。その頃マッサージ料は七十銭から九十銭だったが、私はまだ勉強の身だからといってたいがい三十銭、多い時で五十銭ももらった。(注2)

昭和十五年に卒業し、本格的に仕事にうち込むことになった。住み込み先は蓬萊町(現宝来町)のマッサージの先生宅で、当時このあたりは花柳界だったので朝と夜の仕事がほとんどだった。仕事は、お客や芸者さんのマッサージ、お客には市会議員もけっこういた。夜中二時ま

で働いた。電話も余りない時代だったので、ねえやが迎えに来て、帰りは一人で帰った。杖をつけて音と臭い、歩数を数える。一間はだいたい三歩か四歩と見当をつけて歩くとまちがわれない。通りとか小路などは耳で風をきいて広いか狭いかが判る。仕事が終わって住み込み先の家へ帰っても家が狭く、茶の間のような部屋に住んでいたから夜どんなに遅いといっても朝ゆっくりねている訳にいかず、六時には起こされてしまい、心細く誰れにも頼ることも出来ず、つらくてつらくてどうしようもなかった。トイレに入ると泣こうと思わなくてもポロポロ涙が出て床にボタボタ落ちるのがわかった。久しぶりで盲啞院へ行った時、院長先生の奥さんから「心細かったでしょう」とやさしく言われ、奥さんにすがって泣いた。

昭和十六年太平洋戦争が始まり、物も乏しくなってきた頃、奉公していた家の先生がガンでなくなり、それから一年後に奥さんも亡くなった。私はマッサージ師の免許もあることだし、ここで開業したらという人もいた。その頃は目の見えない弟(三男)を連れて再婚して男の子を産んだが、わずか三年で再婚した夫が脳溢血で突然死んでしまった。あつという間だった。目の見えない



— 史女ケラー・ヘレンの当時の函来 —
 (より史沿革 学校 盲学館 函道 北海) " " " "

とになり、浴衣を持つて壇上に上り、さして壇上にと、トムソンという通訳の女の人が頭をなでてくれ、ヘレン・ケラー先生は両頬を私の顔におしつけて「ア・リ・ガ・ト・ウ」と日本語で言った。それから「サ・

弟も母が再婚して間もなく死んだ。
 昭和十七年、生まれたばかりの弟と祖父（母の父）と三人になってしまったし、戦争もはげしくなってきたので私も大沼へ引き上げることにした。
 父をはじめ、姉、弟などの肉親や、恩師との死の別れと、私にとって最もつらく悲しい時代だったが、たった一つの楽しく暖かい思い出はヘレン・ケラー先生との出会いであった。

昭和十二年六月二一日、函館盲啞院にこられたヘレン・ケラー先生に私は浴衣を（注3）盲生代表として贈ることになり、浴衣を持つて壇上に上り、さして壇上にと、トムソンという通訳の女の人が頭をなでてくれ、ヘレン・ケラー先生は両頬を私の顔におしつけて「ア・リ・ガ・ト・ウ」と日本語で言った。それから「サ・

ヨ・ウ・ナ・ラ」とも言った。肌がツルツルでやわらかく温かかった感触を今もあの息のような言葉と共にはつきりと覚えていいる。

戦争・終戦・結婚

昭和十七年、大沼へ引き上げた私は、母の家で「鍼灸マッサージ」と看板を出し開業した。

当時大沼は鉄道の鹿部線のトンネルの突貫工事をやっていた、飯場や偉い人達の家族が住む官舎が何軒もあった。飯場には半島人といっていたけれど強制連行でつれて来られた朝鮮の人達が働かされていたようだ。そういう人たちを監督するのは言葉のなまりから関西からきた人たちが多かった。私は軍幹部の人のマッサージでいそがしく、そこでお米をもらったりして不自由はなかった。家も一軒買うことが出来た。飯場の監督などは、他の人がギリギリの生活をしていたのうましく立ちまわって豊かな暮らしをしていた。大沼電鉄という私設の大沼から鹿部までの電車があり、牛乳を運んでいたが、当時牛乳は大変貴重品でなかなか手に入らなかったのだが、それ

を飯場の監督の飼っている犬に飲ませていた。飯場で働いている朝鮮の人達の間では発疹チフスがはやり、ずいぶん死んだと聞いていたので病人に飲ませるといいのにと腹が立った。

又、大沼の大きな商売をやっている家によばれて行った時、その主人が「オレのこの家の立派さは分からないだろうな、目が見えないんだから」と言われグツときたけれど仕事申中だったから「そうですよ、せつかくだけれど、目が見えないもんで、分からないんですよ」と言ったが、本当にその時も腹が立った。

戦争中、私は目が見えないということでひげ目を感じていたが、気持ちの上では銃後の守りの一翼をになつていると思つていた。兵隊に行つて怪我をして帰つてきた人のリハビリのマッサージとか、七飯の陸軍病院に友人と慰問に行つたり、留守家族には頼まれるとマッサージ料を安くしてあげたり、千人針も刺した。

カタカナも覚えた。四角い升ヌス(点字でまわりの線をつくる)上に紙を置いて浮き上がった升の中に鉛筆でカタカナの字を入れていって慰問文を書いて傷痍軍人に出し富山県の軍人から返事をもらった事もあった。

隣り組で避難訓練があつて、夜暗いところで縄を張りその縄を伝わって歩くのだが、私はお手のものでいくら暗くても平気だったが、他の人は手さぐりをしたり、男の人はこういう時とばかり女の人に触つたりしていた。私とすれば、目の見える人が右往左往しているのがおかしかったが、笑うに笑えず堪えるのに必死だった。

もう一つおかしかったのはこれは結婚してからのことだがよく停電があり、よその家では夕ごはんも食べられないというのに私の家ではゆうゆうと食べていた。そういう楽しみもあつた。こんな時、世の中は公平だなど思つた。

戦争末期になつたら毎日のように空襲があり、戦争がおわる一ヶ月前の函館も空襲になり大沼にいてもはげしさが分かつた。七月十四日飛行機が飛んできた。鹿部のあたりで艦砲射撃の音だというのが「ズシン、ズシン」と地響きのような音が何回もきこえた。函館の大門「まるみ」の肉屋が焼夷弾にやられたとか後に聞いたが、その時、主人(のちに結婚する小路一郎氏)は大森町の日の出旅館(現ロイヤルホテル)の専属のマッサージ師をしていて爆風に飛ばされて気がついたら死んだ女の

人の横に倒れていたのだそうだ。

戦争が終わる少し前祖父が亡くなった、八七才だった。祖父の骨納めに大野に行った時に玉音放送をきいた。張りつめていた気持がガツクリきた。丸腰になったんだからもう戦わなくてもいいという気持と、これから先どうなるのか不安だった。ずうっとたつてから日本は負けて良かったと思うようになった。

終戦になると旅館も進駐軍に接収されたり、旅行も禁じられたので仕事がなくなつてしまい、生活も苦しくなつたので、母は真綿の毛糸、毛皮の足袋、魚などを大沼から田舎へ行商に歩き、私も留守をしながら豆腐、カマボコ、納豆など売り、その暇に編み物をして暮らしをたてた。その頃、親戚の農家に働きにいつていた、たった一人残っていた妹がすっかり体をこわし自転車も乗れないぐらい働かされて汽車でようやく帰ってきた。母は「こんなになるまで働かせるなんて」とひどく怒っていたが、その妹も何ヶ月もしないで死んだ。十九才でやはり結核だった。

母の行商や私の編物だけでは生活出来なくなつて、夜は「どんぐり坊ちゃん」という人形をつくる内職をした。

どんぐりに布で着物を着せ、どんぐりの帽子をかぶせた人形で大沼のみやげ屋に卸した。そのうち母も行商やら内職やらでつかれが出たのか結核になり、私も仕事がなかったので、ひとまず私だけ、函館ならマツサージの仕事もあるだろうと昭和二五年にもどつて来た。

旭町に三畳一間の室を借りた。前に蓬萊町に居たから知っている人も多かったので、自分で歩いて仕事をさがした。丁度その頃(昭和二五年)、禁止されていた旅行も解除になり、湯川温泉もにぎやかになつてきた時で、知人から仕事を手伝わないかと言われ、母も病状がおもわしくなかつたので母を引き取り湯川へ移つた。そこで今の主人と知り合つた。主人は盲啞院の二年先輩で大正四年一月二日千島エトロフのシヤナ生まれであつた。私は目の見えない者同士の結婚は大変だろうから、むしろ手とか足の不自由な人の方が補い合えるのではないかと思つていたので、なかなか結婚にふみ切れなかつた。しかし、病気の母に安心させてやりたいという気持もあつて昭和二六年に結婚した。私は三十才になつていた。

結婚する時も生まれてくる子供のことが心配だったが、二七年に長女・三一年に長男・三六年に二男とみんな無

事にうまれた。

子供を育てるのも大変だった。当時主人と湯川で開業し人も使っていたが、子供は自分で育てようと思っていた。ミルクびんはガラスでできていてカンカンと指で叩く音で八〇〇〇とか一二〇〇〇とか分かった。昔の粉ミルクはなかなか溶けなくて鍋で沸かして砂糖を入れた。

オムツの取り替えも便にさわってみたり、臭いをかいで消化されているかどうか知ることが出来た。長女ははじめての子だったので体も弱く泣き虫で抱き通しのこともあった。主人もこの子に何かあったらオレ達の責任だともよく言っていた。ご飯を食べさせるのも向かい合つてという事は出来なく、子供をひざに乗せて同じむきになつて手さえきれいならとよく洗つてご飯とおかずを混ぜて手で食べさせた。後の二人の男の子の時は私自身も慣れたので楽だった。一番困つた事はつめ切りだった。誰れにでも頼めるものでなく、私が「つめを切るよ」というと「いやだ、だつて血が出るんだもの」と言われた。また「本を読んで」と言われ「母さんは目が悪いから読めないんだよ」という時一番つらかった。子供が学校に行くようになって肩身の狭い思いをするのではないかと心

配したけれど、みんな親おもいのやさしい子に育つてくれてありがたいと思つている。今はそれぞれ家庭を持つてしあわせに暮らしている。

母は私や孫のそばで昭和三年に死んだ。五六才だった。

今 おも う こと

昭和二五年に大沼から函館に出てきて一人で働いていた頃、マツサージ師はお客のいう事をきくのが当り前と、とんでもないところを揉めと言われたり、室に入ると鍵をかけられ、いきなり襲いかかられ必死で逃げた事も何度かあった。パンマと言われた事もあり（パンマとは、パンとアンマから作られたようで、売春もするアンマさんのような意味）ずい分いやな思いをした。まじめにやろうとした人が苦勞した。若い頃はマツサージ師という仕事がいやでたまらなかつた。

この頃はいやな事があると長生きしすぎたなど思つたり、またいいことやらうれしいことがあると生きていてよかつた、やはり幸せなんだと思ひ、人生はゆきづまり



—昭和62年身障者大会市長賞受賞のキサさん—

がない波のようなもので、自分が若い時不幸だと思っても長く生きていけばいい事もあり、人の役に立つこともある。若い時というのは人からありがたがられてもそんなに感じないものだけれど、年を取ってこの商売をしてお客さんから「ああー楽になった」という言葉をきくと、私の疲れがすっとぬけてこの仕事をやっていてよかった、職業冥利につきるなとつくづく思います。

あと書きにかえて

この記録はテープと電話でお話し下さったものをまとめたもので、取材に快く応じて下さった小路口キサさんに感謝いたします。

日本点字が制定されて百周年目（一九九〇年十一月十日）の記念すべき年に盲人の方のお話をうかがえたという事は意義のあることだったと思う。

日本点字はその間、色々改良を重ねながら視覚障害者の教育に役立ってきた。しかし日本盲人会連合によると点字使用の幅が広がったとはいえ、戸籍・納税・年金関係などのプライバシーにかかわる公的な書類に点字が認

められていないなど不便なことも多い。(一九九〇年十月二八日付朝日新聞)

現在キサさんは函館視力障害協議会盲人部の婦人部長として活躍され、家庭では療養中の御主人のお世話のかわら好きな編物などして過ごされている。この平穩な日々に至るまでの事は書きしるしたが、「話しをすれば本の一冊や二冊では納まらないですよ」とお会いして最初に言われた言葉が忘れられない。

文中キサさんが従兄弟同士の血族結婚の弊害についてふれられていたが、はたして全盲者の誕生が血族結婚によるものなのかについては医学専門家の判断にゆだねるべきでないだろうか。

(注1) 函館訓盲会として明治二八年米国宣教師ドレーパー氏の母マイラ・エニド・ドレーパーの私財で青柳町五二番地に創設され、その後函館訓盲院(明治三四年)、私立函館盲啞院(明治四五年)、財団法人函館盲啞院(大正一四年)、函館私立盲学校(昭和二二年)、北海道立函館盲学校(昭和二三年)、北海道函館盲学校(昭和二五年)となり現在

に至っている。

(注2) 当時昭和十四年、函館新聞代一ヶ月一円十銭・米小売相場一等米一升四一銭五厘・二等米四一銭・三等米四十銭五厘

(注3) 三重苦の聖女ヘレン・ケラーは三回日本を訪れている。第一回が昭和十二年で陰悪になった日米関係をときほぐす親善使節としてひそかにルーズベルト大統領の親書を携えてきたという。

文中キサさんは浴衣を贈ったと言っているが、北海道函館盲学校沿革史では生徒からメリンスの振袖が贈られたとなっている。

(参考文献)

粟津キヨ著『光に向って咲け』—齊藤百合の生涯—岩波新書

元木省吾『函館の履歴書』昭和四七年

『北海道函館盲学校 北海道函館聾学校沿革史』昭和三二年

陸軍病院の思い出

——宮川ワサさん——

伊原 祐子

私は大正四年十二月八日秋田市の郊外で生まれました。生家は齊藤と言います。祖父と父は農業（主に米作）をしておりましたが、祖母も母も助産婦でした。母は二人姉妹の長女でしたから祖母の後を継いで助産婦になったそうです。

私をとりあげてくれた祖母は、誰もめつたにつけない名前を、と言うことで、ワサと言うことになったわけですが、私にしてみれば誠に迷惑なことです。

母の働く姿を見て私も将来は医療の道へと言う気持ちに駆られ、昭和十年秋田の組合病院付属看護学校に入りました。

昭和十四年四月秋田陸軍病院勤務を志願し、試験を受

け合格しました。

秋田駅の近くに、秋田歩兵十七連隊があり、その敷地内に陸軍病院もありました。昭和十四年三月から二十一年四月末まで勤めました。

病院は、外科と内科の二つで、併せて三百名程の傷病兵が入院しておりました。ほとんどが肋膜炎患者です。戦地での厳しい訓練と栄養不足から病気になるんです。肋膜炎が悪くなると菌がでると結核です。結核病棟は普通の病棟と離れてました。軍医は七名、看護婦は十六名で後は衛生兵の手をかりてやりました。衛生兵の仕事は主に看護婦の助手で、徴用で連隊に入り命令を受け三カ月



一戦地へ赴く従軍看護婦
を送るワサさん一
(昭和17年頃上から二人目)

程訓練を受け任務につくようでした。軽い肋膜炎患者は大部屋で一室に五十名程で病室づき看護婦は一名です。大部屋は三室で他は二十名、三十名、五名位の部屋もありました。准尉以上と重傷患者は小室に一人か二人、入っていました。

月に一回か二回、傷病兵が戦地の病院から東京の第一陸軍病院に護送され、そこから入隊した現地の陸軍病院へ護送されて来るわけです。一回に七名から十名位の時もあります。護送されて来る時間は、汽車か何かの都合でいつも午後七時半頃でした。それを出迎え、病状によって病室を区分し、部屋に落ちつかせ、上官に申告をしなれば帰れないので帰りの時間が不規則になります。最

初は下宿ずまいをしましたが、三ヶ月で自炊生活に代えました。連隊の敷地がせまく看護婦の寮はなかったのです。

特に冬、当直をした次の日は疲れ、食事を作る元氣もなく、帰る途中に銭湯があつてその前にゴマのついたおいしい大学いもを売つてましたので、お風呂の帰り十五銭ほど買つて帰り、体の暖かいうちに布団に入つて寝ながら食べるわけです。朝おきると、いものかけらが口に残つたままなんてこともありました。

勤務は朝九時から五時までが普通勤務で当直の時は、ひきつづき翌日の夕方までの勤務となります。当直看護婦は四人です。重傷患者が居る時は二時間おきに交替で見ますのでねむれません。他に非常呼集の訓練も重なつたりすると、ほんとうにつかれました。何もない時は、朝の検温が六時ですので五時間程ねられる時もあります。当直は三日に一度でした。

給与は最初の頃(昭和十四年)は三十二円でした。やめる頃(昭和二十一年)は五十二円でした。

一旦勤務に就くといささかの氣の弛みも許されず緊張の連続でした。看護婦は全員若く同じような年令で、互

いに励まし合い、明るく張り切って働きました。

当直勤務でとくに気にかかったことは、死亡患者の発生でした。勤務に就く時はいつも「今夜はどうか死者が出ませんように」と祈る思いでした。運悪く死者の出たときは死体処置をして看護婦二人でタンカで屍室へ移送するので、その際に衛生兵に連絡をとり屍室で立会いをしてもらうことになっているのです。ところが都合で衛生兵が立会いに遅れ姿を見せない時があり、そんな時は薄暗い屍室で死体と一緒に居ることがとても恐ろしくなり、タンカもろとも死体を置き去りにして飛び出して来たこともありました。今では「意気地のないことをしたものだ」と思いますが、物事に敏感な年頃でしたから無理もないことだと思います。

恐しい思いをすることの外に、とても悲しい思いをさせられることも少なくありませんでした。

戦場（戦地は秘密にされていた）掃りの一人の若い兵士（結核患者）が危篤状態となったのですぐ家族へ連絡をとりました。患者がだんだん悪化していく様子、家族の一刻でも早く来院してくれることの願い、そんな気の

もめた数時間後に、ようやく駆けつけてきたのは、その兵士の妻と見受けられましたが、病室へ駆けつけてきた時は目を落としたときでした。

若妻の慟哭、悲しみ……突然、若妻は兵士に顔を近づけると強い口づけをして幾度も幾度も音をたて吸い続けるのでした。結核患者は死亡した時に菌を全部吐き出すということですから、私等が止めなさいと言っても、自分も死んだほうがよいからと言ってきませんでした。

苛酷な戦場生活で蝕まれた肉体、帰還しての病院生活にも家族の手厚い看護も受けられず死んでいった兵士、そして死後の対面を余儀なくされた若妻、それを思ったとき、私は呆然としてしまったのです。これはいつまでも私の脳裡から去ることのない悲しい光景でした。

内科の患者と外科の患者はとかく対照的で、内科の患者の扱いは気が重く、外科の患者の場合は少しぐらい傷害の程度が大きくても、気分的に明るいものがありました。

脊髄損傷で半身不随となり自力で排便できないので三日に一度はゴム手をつけて、手で便を出してやったこと

もありました。

外科病棟は大変でしたが、私の気性に合っていました。当直の夜、看護婦も衛生兵といっしょに、非常呼集をかけられることがありました。夜中にラッパが鳴って、誰が早く訓練場に出てくるかを、当直の上官（中尉）が時計を持って見えています。非常の場合に、いち早く仕事につけるかの訓練をするのです。訓練の好きな上官が当



—担架訓練（昭和17年頃）—

直の夜は白衣のまゝねむることもありましたが。そのほか昼中は、消火訓練、ガスマスクの訓練などもありました。冬の夜の訓練はきびしく辛いものでした。看護婦でも兵士と同じ訓練、軍律がありそれは厳しいものでした。厳しさの中にも

楽しいこともありました。それは有名な歌手や俳優の慰問来演、民間団体の慰問。一年に二回の病院を挙げての演芸会です。演芸会は、入院中の傷病兵を元気づけるためでもありました。

秋田名産の、梨を栽培している農場への招待も毎年楽しみでした。



—梨農場で—

とくに嬉しかった思い出として心に残っていることは、患者が、自宅療養となる場合です。

戦地から現地の病院へ護送されてくる傷病兵は殆どが一旦部隊へ帰されますが、入院生活が長くなって自宅療養が必要な時は直接退院させる場合もありました。そんな時は、衛生兵か看護婦が家ま

で付き添いをして家族の所へ送り届けるのです。

私も一度、上官の命令を受けて遠く離れた山村へ付き添っていくことになりました。家族は私の労をねぎらい、大歓迎をし、餅をつき鶏をつぶすなどして、ご馳走をし、帰りには、沢山の手みやげまでいただいて帰りました。これは、陸軍病院看護婦ならでのことと思えます。

悲喜こもごもの中にも充実した、陸軍看護婦生活は、終戦と共に秋田歩兵十七連隊も解散され、陸軍病院は国立病院に変わりました。

娘時代、全身をぶつけ働き通した陸軍看護婦の仕事は悔いのない楽しい思い出です。

△ △ △

ワサさんは、陸軍病院勤務時代にお母さんを亡くした。

「陸軍はとても厳しい所と思ってましたから、母と、急用の時や病気になった時はキトクと電報を打つよう話し合っておりました。ある朝、連隊の門兵に「斉藤看護婦ノキトクの電報が届いてるよ」と云われたんです。私は母と話し合ってたものだから、家に帰るまでは、そ

れ程心配しておりませんでした。駅に着くと村の人が何人か出迎えてくれまして、ワサちゃんお母さん亡くなっただよ」と聞かされた時は、地べたに坐り込んでしまいました。弟が旅行中でなかなか連絡が取れず、死装束を見せるのは、かわいそうで弟の帰りを待って、私と妹と弟、三人で母を棺におさめました。

普通の死者は白い着物を着せ、男も女もみんな頭を剃ったものでしたが、母は助産婦でしたから村の女の人達が助産婦は血にまみれて働くからと敬意のしるしとして赤い着物を作ってくれたのです。着物の裏地で縫った赤い着物を白い死装束の上に着せ髪も剃らずに私が頭のうしろに束ね、箆こしがのかわりに割箸一膳を割らないままさしてやりました。

当時一般の人は樽で造った座棺だったのですが、村の人たちが母のために厚い木で立派な寝棺を造ってくれ、土葬しました。私が二十四才の時で今から五十年も前のことですが、母の死顔ははつきり憶えています。忘れることができませぬ。」

ワサさんはお母さんの死後、長女として母親の代わりとなつて、お父さんの世話をしながら病院勤めを続けた。

昭和二十三年二月二十八日、函館の親戚の紹介で、除隊して来たばかりの宮川忠治さんとお見合い結婚をした。

「私は三十才を過ぎてました。主人は大正三年十二月七日生まれですから一才ちがいでした。酒もたばこもやらない真面目な人だと云われ、会ったんです。やさしそうな人でしたので結婚をきめました。翌年の一月に長女が生まれました。戦後のないものづくしの時代で産着は、私の着物を改良して着せました。私は秋田育ちなので、いもやカボチャは食べられません。大きなお腹で秋田まで月に二、三度お米をもらいに行きました。主人は国鉄勤務で昔は家族パスがあつて汽車賃がかからなかったわけです。お米は統制品ですから、見つからないよう苦労したものです」

ワサさんは御主人の転勤で、松前町大沢に移った。大沢は漁村で村の助産婦、保健婦を頼まれ働くことになった。

「子供が小さいので主人は反対だったのですが、駅長さんに村のためにと云われしかたがなかったのです。子供は同居していた主人の父親にあずけて働きました。

保健婦として近郊の学校の予防注射をしたりと、それ

は忙しい毎日でした。助産婦としては、受胎調節の講習を受けに札幌まで行きました」

昭和二十三年、優生保護法が公布され、九月から実施された。

「受胎調節は男の人の協力がなければだめですから、自転車で村を廻ったのですが、男の人達は、遠くからでも私の姿を見つけるとにげだしてしまいうわけです。助産婦の仕事は勇気と決断力のいる仕事で、陸軍病院での体験は良かったと思います。

函館に帰ってしばらくは美馬産婦人科で、助産婦として働き、五十一歳で視力障害センターに勤め六十六歳まで十六年間勤めました」

宮川さんは今年七十五才になるが時々老人ホームなどで講演を頼まれ、老後の健康や寝たきり老人にならないためのお話しをしている。

〈付記〉

この聞き書きは、宮川ワサさんの手記をもとに取材させてもらいました。(伊原)

遠い故郷・エトロフ択捉島墓参

——河ロキワさん・押野久子さん——

酒 井 嘉 子

は じ め に

一九九〇（平成二）年の夏、ソ連政府の許可が下りて戦後四五年をへて初めて千島列島（注一）中最大の島、沖繩本島の二倍半強の面積をもつ択捉島への墓参が実現した。

今回の北方地域墓参（注二）は、初めて認められた択捉島及び国後島・色丹島・志発島の四島、七ヶ所を三班に分かれて、八月二四日から九月二日に実施された。

全国からの参加希望者は前年より約百人多い四三五人で、半分以上が択捉旧島民又はその関係者だったという。

その中から選ばれた八八人中、第三班の択捉島（旧紗那―現クリリスクと旧シムト薬取）墓参には、男性十五人・女性八人の計二三人が参加、平均年齢は六四才であった。函館からは最高齢の河ロキワさんと若手の押野久子さんの二人が参加、このお二人に取材させてもらった。

（注一）千島列島には古くからアイヌが住んでいたが、十八世紀以降日露両国が衝突をくりかえしていた。函館の豪商高田屋嘉兵衛がエトロフに漁場十七ヶ所を開いたのは十九世紀の初めである。一八五五年日露和親条約により択捉島以南を日本領と定めたが、一八七五（明治八）年、日露間権太・

千島交換条約が調印されてからは全千島が日本の領土となった。現地に居住するアイヌについてどちらの国民に属するか、それぞれ本人の意志に任せる事になったという。

一九四五（昭和二〇）年太平洋戦争の敗北でソ連軍が占領し、数次にわたる強制的引揚げ以来、近くて遠い外国となった。一九五一（昭和二六）年ソ連の参加しないサンフランシスコ講和条約で日本政府は千島放棄を約束したが、日ソ間で領土問題となっている。

（注2） 北方地域墓参は一九六四（昭和三九）年第一回目が実現して以来一九八九（平成元）年までに計十二回実施され、合計五二四人が択捉島以外の歯舞諸島・色丹島・国後島に墓参している。



—北鳳丸を背に函館から参加した二人—
（中央杖を持っているのが河口さん、その右隣りが押野さん）

一、河口キワさん

昨九〇年八月十日付「北海道新聞」に「四五年ぶり故郷捉島墓参へ」と写真入りで紹介された河口キワさんには、十二年ほど前一度取材させてもらった事がある。

『道南女性史研究』(第二号)記載の「捉チト捉ト島のくらし」の河口キワさんは、明治生まれの多くの女たち同様働きづめの人生を送ってこられた方である。

彼女は一九〇九(明治四二)年薬取村で生まれた。生家は何代も前からずっと薬取に住んでいたという。父親捨蔵さんは夏は栖原ハル漁場の雇われ漁師として働き、冬は薪用ガンビ(白樺)伐採のため山小屋ずまいが三月末まで続いた。母親タカさんは、捨蔵さん達八人兄弟の長姉―みんなからスオばっちゃんと慕われたアイヌ酋長の娘だったとか、一九二八(昭和三)年七五才で亡くなるまで河口家の采配を振った人である―に幼少から養育された人で、気に入られて結婚した。

九人の子供が生まれたが、うち四人は赤ん坊の時亡くなり、キワさんと姉と弟三人が成長した。母親は、スオばっちゃんと豆腐やコンニャク(原料の大豆やコンニャク粉は函館から仕入れていた)等作って売っていたので忙しく、キワさんも子供の時から働いた。

一九二七(昭和二)年十八才の時、北海道から稼ぎに来ていた漁師と知り合い結婚。夫與一さんが河口家の婿養子となった。

翌年、尚なお子さんを出産する。妊娠中も出産間際まで働いたし、出産後も赤ん坊を背負って、やがて尚子さんの手を引いて出面取りやふのり採りに精出した。

冬の半年間、家からは道行く人の足しか見えない程雪が積もり、屋内のランプ用石油さえ凍る事がある程の厳寒で、薬取など西岸(東岸の天テシ寧ネイだけが島唯一の不凍港で、師団司令部が配置されていた)は氷に閉ざされて漁もなく、ほとんど収入もなくなってしまうので夏一生懸命働いたという。

「(ふのりは)採れる時期が七月半ばからの三週間

くらい、そのうち天候に恵まれた二週間くらいだったので、皆必死でしたよ。私なんか、うちに舟もないし、大概の女は海に腰から胸のあたりまで漬かり、手で海水を漕いで岩にはえているふのりを両手でもぎ採るのです。海から上がると腰のあたりに乾燥した塩が白い線となつてこびりついていました。」

ふのりは乾燥させ、大きな俵につめ仲買人を通じて函館の間屋に売り渡された。

「(出面取りは) 裁割、鮭や鱒の鰓や臓物を取る仕事です。生の魚で腐ると困るから、豊漁の時は早朝から夜遅くまで、夜中十二時頃までも働きました。」

食事は、朝、昼、晩と出、子供の分も出ました。」と語っている。

一九四〇(昭和十五年)年、夫が病没し、キワさんは中風で寝たきりの養父(父親の兄弟)の世話をしながら以前にもまして働いた。

父親は既に亡く、姉は横須賀に弟(長男)も函館にと島を出、やがて次男、三男、母親も長男の所へと島を出て行き、島にはキワさん達三人が残った。

尚子さんが国民学校高等科を卒業して村役場に勤

め出し、少し生活が楽になり始めた頃、敗戦。ソ連軍が上陸して来た。役場は閉鎖され、キワさんは娘さんと共にソ連軍政下の魚加工場で昼夜働き始めるがそれも冬の到来と共に閉鎖。ソ連兵の洗濯をしたり寄せ集めの混紡糸で靴下や手袋、耳かけを編むなどの内職をしながら「かつこうが鳴き、いつせいに花咲く春」を待ったという。

翌四六(昭和二一)年九月、五年間余りたれ流しの病人だった養父が亡くなった際の隣人(ソ連将校夫妻)の奥さんの好意は忘れられないと、占領下でイヤな思い出はないとも語った。

一九四七(昭和二二)年、強制引揚げが開始されキワさん母娘は九月三日薬取村を出た。住みなれた家・土地・弟さん名義の役畜用白馬一頭に心残しながら樺太の真岡経由で約一ヶ月後、函館西浜岸壁に着いたという。母親が長男家族と一緒に弁天町に住んでいたが函館での生活も決して平坦ではなかった様である……。 (以下省略)

十一年前、「どこでもそうですが、働きすぎるとアイヌ



—エトロフ土産の“ぬいぐるみ”
をもつ河口さん—

のくせにってコソコソ言われて……もう一度あの島に帰りたい。私たちは島出身者で函館には土地も家もなかったし、未だにない。島の自分の土地がどうなっているか考えることがあります」と語っていたキワさん！ 択捉島への墓参が実現し、どんなにか喜ばれていることだろう……それにしても、引揚げの時三八才だったキワさんは四七才の時に一人娘尚子さんを結核で亡くし、現在八一才、お孫さんと二人暮らしである。択捉島よりも函館の暮らしの方が長くなっている。

もう帰函されているだろうと、何回電話しても留守ら

しい。ようやくお会いできた時「餞別を一〇万円もいただいたのでお礼かたがた報告に毎日出歩いていたんです」と旅の疲れは見られない。

自分は選ばれて、やっと念願かなって行けたのだから今回参加できなかった同郷の人々（渡島支庁管内に旧薬取村出身者は四二名ほどいるらしい）への報告は自分の勤めと心得ているかのようなのである。

しかし、四三年ぶりにやつと行くことのできた択捉島で、キワさんの故郷薬取村はなくなっていた。全て砂でおおわれて風化し、赤いハマナスやリンドウが一面に咲いていた。「初夏に鱒が、晩秋にかけて鮭が遡^{よかほ}って来て賑わった」という薬取川も川幅がすっかり狭まり、左岸に開けた村―当時八七世帯、三四七人の人々が常住していたという村は跡形もなくなっていた。尚子さんの勤めていた村役場も郵便局も火の見櫓も尋常小学校も、丘の中腹にあったはずの墓地もなかった。

足も目も不自由なキワさんも、みんなの制止をふり切つて杖にすがって背丈ほども生い茂つた笹をかき分け登り続け探したが墓地は見つからなかった。

ソ連側の案内で旧墓地跡から約二〇〇メートル下の麓

に十八基（注1）の墓石が発見され、現地の国境警備隊員の手をかりて墓石を掘り起こし墓碑銘を確認、きれいに並べて日本から持参した品々を供えて慰霊祭を行ったという。

「私のイモ畑に墓石が投げられていた。四〇何年間の歳月はひどいものです。四〇何年間もこうやって投げられていたかと思うと、本当いうと声を上げて泣きたい位でした。駒井さんのおじいさんの墓（注2）見つかりましたよ。新聞（例えば、九〇年九月三日付「北海道新聞」）で私が水をかけていた写真、あれは駒井さんの墓石です……私の父親や主人の墓は、石塔を建てるだけの力がなかったから五寸角の木材の長いので建てましたが、朽ち果ててなかったのです。でもねエーわたしらの先祖、アイヌのね、平野捨六エトロフ島酋長って彫ってたのではありません。私の親戚も行きましたから、先祖のだよって教えてくれました。嬉しいやら悲しいやら……それはちゃんと石の立派なのです。」と語ってくれた。

（注1、2） 墓といっても大半は木製の卒塔婆だったように、墓石が確認できたものは当時島や村の有力者のものであったと考えられる。墓参団が薬

取で読みとった墓石は十八基、外に土台十二程度とメモにあるが建立者が確認できた墓と故人の戒名が確認できた墓を合わせて十八基である。キワさんがいう駒井弥兵衛氏は建立者名として確認されている。

新聞報道ではキワさんは「来たかいました。もう充分です」と語っているが、今回の墓参は彼女の夢の一部の実現であると思われた。初めての択捉島墓参に加でて、渡辺昭二氏（千島齒舞諸島居住者連盟事務局長）や駒井惇助氏（北方領土復帰期成同盟渡島地方支部事務局長）はじめ多数の人々の尽力に感謝していたが、彼女にとっては島がかえり自分の土地で生活できるようになるまでは……と感じさせられた。取材のわり近く、「署名おねがいします」と袋から領土返還署名用紙をとり出したのが印象に残った。

二、押野 久子さん

私は昭和十一（一九三六）年、薬取で生まれました。

六人兄弟の一番下です。大正生まれの姉（長女）も亡くなり、兄たち、長男も四男も亡くなって、一番行きたがっていた兄（次男）も亡くなって、三男と私が残っているんですが、親戚の中で私が一番先に行くことが出来ました。真先に行かせてあげたかったのに、母も亡くなって、三十三回忌をすませましたし、一番行きたがっていた方々



— 押野 久子さん —

はみんな亡くなっていて、
なっている。

扨捉にお墓

があっても入れないで亡くなるんだな（墓参団のみなさんもそうだと話してきました）。

父は昭和十八（一九四三）年に亡くなりました。郵便局長だったことですが（久子さん七才の時）、島で召集され戦争で亡くなっています。突然の艦砲射撃だったと聞いていますが、どこで亡くなったか分からない、遺骨は届いていません。金鷄勲章かなにか戴いて母は神棚に供えてました。私の記憶の母はもんぺ姿で白いかつぼう着して、今でいうボランティア精神のかたまりみたいな人でした（と涙ぐまれた）

母子所帯となり年金かなんかもらったと思いますが、こっちに引揚げて来てから「お宅、公務員さんだったかいいですね」って世間から言われたが、現実はとんでもない。今でもザワーとします。母は苦労したと思います。

昭和二三（一九四八）年一番最後に引揚げて来ました。姉は結婚してましたし、旦那が駒井さんの漁場を預かっていた人なんです。長男、次男は召集うけて戦争に行っていましたから、三男、四男と私（当時十二才）が母と四人で引揚げて来ました。

函館に身寄りも誰もなかったのですが、私が病気になるてしまい髪の毛が真っ茶色になったんです。函館に着く

とそのまま元町の避病院（隔離病院）に収容され、くる病って診断され千代ヶ岱（現千代台町）にあった国立病院に入院したんで、そのまま居着いてしまったんです。

五稜郭の引揚げ者住宅に入りました。三男と四男は身内を頼って余市の方へ行きましたが苦勞したようです。函館に引揚げてから、戦争に行つてた兄たちも旭川あたりにおいて無事だと分かりましたが、みんなバラバラになつてしまい、最後まで私が母を見ました。生きていれば今年九二才。明治三二（一八九九）年生まれです。

兄弟はみんな薬取生まれと思います。でも母や祖母がエトロフ生まれかは分かりません。兄の話では、漁場開拓というかたちでやつて来たのかどうかも分からない。

新政府（明治政府）のできる前に南部藩か仙台藩の藩士として派遣されて渡つたみたい。だから原住民でないんだな—って分かりました。「むこうでお生まれですね」と聞かれると、そっちの方に興味あるのかなと思います。

今回墓参が決まつて北見の兄（三男）に電話したら、引揚げた時点で、私たちは没収されたと思つてましたが税関の方では預かつていたといつて、昭和十四年から十八年の国債がもどつて来ました。第一勸業銀行と印刷さ

れていて、兄と半分ずつしました。私の方は一から二〇の番号がついています。額にでも入れて飾ろうかなと思つています。税関では母子家庭だったのに国債を持つていたと言われました。

まさかと思いましたが祖母（佐々木キエ。キエさんの長女が久子さんの母白浜キヨさん）の墓見つかつたんです。本当だろうかと何度も見直しましたが、うちの家紋の「丸に違い鷹の羽」がはつきりと読みとれました。「空梅庵静香信女」つて彫られてたのをメモしてきましたが、墓参団員に配布された資料には記されてないでしょ。佐々木キエが建立（大正十三年五月十二日建立と資料にある）したのは載つてますが……。

私のおばあちゃんですが、祖母佐々木キエはお酒はじめ手広く雑貨屋を営んでいたようです。祖母が亡くなつてから東北から入つた高木さんという人に家を貸してました。川端孫市（この人が建立したという墓石も資料に記載あり）はキエの兄です。栖原さんや駒井さん、鳥海さん、相馬さんのようにエトロフに漁場を持つていたようです。河口キワさんたちは川端孫市の漁場で働いていた人です。

兄の話では「択捉漁業」の金庫には川端孫市が政府に貸したお金の保証書もあったとの事ですがさあ。

ソ連軍が入ってからの思い出ですか、住んでた家にソ連兵夫婦が入ったので、私たちは高木さんに貸していたおばあちゃんの家に移りました。そこにソ連兵と同居というかたちの生活でしたが、将校クラスの人だったのでよそ様はいろんな事あったみたいだけれど紳士的に付き合って、私は楽しい三年間でした。冬、ソ連の新婚さん夫婦と歩くスキーをしました。夏は山からの雪溶け水が流れている所でしたが……今はただ雑草と竹やぶの中心で感じてました。

八月三〇日は素晴らしい天候に恵まれて、紗那で慰霊祭と交歓会が行われました。

大きな食堂みたいな所で行われた交歓会にはソ連側は係の男性と通訳二人、それに接待係、といってもお酒をついだりしません、テーブルに物運ぶ程度の若い女性数人、日本側は墓参団の二三人と同行してくれた道関係の人や船員（彼女たちを運んだ北鳳丸の）もいました。子供たちが沢山集まって中に入れないで窓からのぞく様に

見ているので、私がこちらから用意していった造花があったので一本ずつ渡したが帰らないんです。紗那には一般の婦人や子供たちも沢山住んでました。薬取は民家は全くなかったみたい、前（引揚げ前）に住んでた方が住んでたらなーという思いがありました……警備隊員の建物と発電所と大きなアンテナがあるだけって感じ。

薬取川沿いにあったはずの家も全くなくなって、両側一面ハマナスの群落っていうのかな……赤い実を一杯採りました。

その砂浜での交流会ははずみました。ソ連からは係の四人と通訳が必ずついてくるんですが一人は極東大学三年生のボランティアで、もう一人は常時ついてた方でサハリン在住の韓国人（道庁の話では北朝鮮の人で現在ソ連籍、サハリンのツアー・サービス所属の通訳。テイさんと呼ばれているとか）の通訳でした。六〇才位かな、礼儀正しく頭よくて父親も母親も戦時中韓国から日本に連れて来られ、終戦の時帰れなくてそのままサハリンに残ったとか、昔は日本人にすごくいじめられた人ではないか、なのに今、日本人の我々のためによくしてくれた」と言っている人もいました。私も大変お世話になりました。

た。

私は通訳や係の人にも許可もらってボールペンと造花一本ずつあげたんですが、それがすごくよかったみたい。大人なんですけどそれだけで言葉通じなくてもやはり同じ



—小さな国際交流……正面のYシャツ姿がティさん—

人間ですよ、通じたと思う。

毎日船を降りたり乗ったりする毎に順番に並んでソ連側にパスポートを見せるんですが、そんな事なしに来れる方法ないのかねエと思います。又来たいですね！「子供も大きいので永住したいのですけれど……」と言ったら「家と食べ物用意しますので今度はご夫婦そろっていらっしゃい」って言われました。私たちが引揚げてから四五年近くになりますが、択捉島にはソ連の人が住み、そこを故郷とする世代も一杯育っているんですよ。

(注) 終戦時、薬取村の常住人口は三四七人、択捉島全島で三六七五人だった、そして現在同島には約一二〇〇〇人のソ連人が住むという。

おわりに

択捉島は国後、色丹、歯舞諸島と共に「北方領土」(南千島)と呼ばれ返還運動もさかんだが、全千島が日本の領土であった歴史があり、北千島の占守島シムシユや幌筵島バラムシルに住んでいた人々、その缶詰工場で働いていた人々の手記などを読むと北千島はどうなのかと思ったりもする。

現在北海道の事業として道の予算―例えば今回の墓参団参加者は根室へは自己負担で集合し、そこからの旅は船内食事代として一日一〇〇円を負担した―で行われている北方地域墓参をどのように考えたらよいか、正直なところ複雑である。多くの日本人が強制的に引揚げさせられたが、その後四五年にわたって多数のソ連人が移住してきているという現実もある。

河口さんは、―母親たちは戦前函館に渡って来ており、彼女自身島のくらしより函館のくらしの方が長くなってはいても―島が返還されるまで彼女の夢は実現しないだろうし、押野さんは墓参できた事に感謝しつつも四〇余年が経過し一番行ききたかった人々が既に亡くなってしまっている事を暗に抗議しているように思えた。そして、現在択捉島に住む人々に気を配りながらも永住したいと語られたことに、冗談半分としても私はドキリとさせられた。

四五年近く待つて実現した四泊五日の墓参団の宿泊は彼女たちを運んで来て択捉島沖に停泊する北海道教育庁実習船「北鳳丸」船内であり、そこから毎回「下船、上陸、墓参、乗船を繰り返す日程であり、乗下船のたびに外務

大臣発行の身分証明書が必要としたという。この煩雑さも仕方ないのだろうか。

因らずも押野さんの話に出た通訳のテイさんやその両親のような人々―多分強制連行かなにかで日本に来、戦前、当時の樺太に渡り、朝鮮人であるために切り棄てられた側の人々の事はどう考えればよいのだろうか。戦争の残したものはまだまだ根深いと思われる。

(参考資料)

- ・ 「北海道新聞」「読売新聞」等の関連記事
- ・ 『道南女性史研究 第二号』
- ・ 『北方領土のあらまし』北海道総務部北方領土対策本部編集
- ・ 『望郷の島々―千島・樺太引揚げ者の記録』
- ・ ⑪樺太・千島引揚げ編『フレップの島々遠く』
- ・ 榎本守恵著『北海道の歴史』
- ・ 「平成二年度北方領土墓参資料」(第三班用)

私の半生——結婚・外地カラフトの思い出

——五十嵐静さん——

四ツ柳 敦子

はじめに

戦争とそれに続く敗戦の時を「外地」と呼ばれた場所ですごした人の体験は「内地」に居た人のそれとは自ずと違っている。異なった生活習慣を持つ異民族の間で暮すことは、それが敗戦国の国民であつてみればなおのこと心労の多いものだったのでないだろうか。

五十嵐静さんは戦前、当時樺太と呼ばれた現在のサハリンに渡り、戦後二年を経て、函館へ引揚げて来られた方だ。引揚げ後は、戦後間もなく発足した失業対策事業に関わり、長年の間全日自労（全日本自由労働組合）の

活動家として活躍された方でもある。今は仕事から退き病院通いが仕事という五十嵐さんに、その体験をうかがつた。

生いたち

私は大正三年、七飯町大中山の雑貨商の家に生まれました。母が私を産んで間もなく亡くなったものですから父はすぐ上の兄と私二人をおぶつて商売してまして、それを見たお客さんの一人が「うちは子供が一人より居なくてさみしいから、ちよつと貸してくれ」といって、私を連れていったんだそうです。それがちよつとどころじや

なくて何年たつても返してくれなくて、父もとうとうあきらめて私を養女に出すことに決めたんです。それまでは里子のようにして預かってもらっているのだからと私の食いぶちは払っていたようです。それで五十嵐の家へ入籍した訳です。ところがそれから一年たつてスペイン風邪が流行した時、父がそれにかかって死んでしまいました。父は津本といい和歌山の人でした。私はその時実父とは知らず、誰か親類の人が死んだと思っていました。

そのまま暮せたら何も苦しい思いをしないですんだ人生だったでしょうけど、運が悪いというのでしょうか、私が小学校二年の七才の時、五十嵐の母もポツクリ死んでしまったんです。五十嵐の家には十いくつも年の違う姉がいました、婿を取つてもう子供も生まれていました。

そんな風ですから今となってはむしろ私は邪魔な訳なんです。母が死んで間もなく子守りばかりさせられて勉強させてもらえませんでした。私のまごばあさん（実母の母）が養母が亡くなった時五十嵐の父の所へ来て、「お宅は孫さんもいるしもうこの子は邪魔になるでしょうから」といつて引き取りに来たことがありました。その時はじめて自分がもらいつ子だということがわかったんですが

でも父も今まで私を育ててきたし、もらった以上は返せないといつて離しながらなかつたのです。五十嵐の家は農家でしたが父と婿さんとが折り合いが悪く諍いさかいが絶えませんでした。それで婿さんが上磯のセメント工場へ行つてしまい一時父と私が大中山に残りましたが、年寄りと子供で農業はできず結局姉夫婦の所へ行くことになりました。上磯では朝三時に起こされ、子守りをしながらマキひろいをしたり、セメントの袋の繕いを姉がしてそれを私が背負つて届ける仕事をしたりで、学校へは行かせてもらえません。十才くらいの頃です。学校へ行きたくて姉の子をおぶつたまま学校の窓から中を覗いてみたりもしました。

女 中 奉 公

そんな風に行っているうち十二になって、その頃、お友達が本州の紡績工場にたくさん女工として働きに行つていましたので私も行きたいと思いました。このまま子守りばかりしていて勉強もお裁縫も習えないのは心細かつたものですから。そんなに行きたいのなら行かせようと

いうことになって出発する前日、亡くなった五十嵐の母の友人で七飯の人が身体が弱いので家事を手伝ってくれないかと言ってきました。父は本州にやるよりいいと、ひどく喜び、まごばあさんも七飯だしと言うことになって二年ほどいましたが、病気の奥さんが亡くなり今度は別の家に奉公に行きました。小さい時から重いものを背負って寒い思いをしたのがたつたのかそこで病気になる、祖母が心配して旭川の叔母（実母の妹）の所で養生することになりました。一年ほどもいたでしょうか、身体も良くなり、さあこれから裁縫も習って勉強もして、と思っていた矢先、五十嵐の家から私を返すように言ってきました。五十嵐の父は「取られる」と思ったんでしょうね。返さなければ裁判かけると言って……。姉婿の実家が秋田県で、その頃五十嵐の一家は秋田に引越していました。今度は学校も通わせるし、お裁縫も習わせるから、とひどくいい話でした。叔母も人を疑うことをしない人でしたし……。ところが私が行ってみるともう既に料理屋に女中奉公の話が決まっていたのです。前金を取ってあったんですね。一晩家に泊まっただけで姉婿の親に連れて行かれました。行った先が料理屋だっ

たのでびっくりしましてね。水商売ですしね。こんな所にいつまでもいられないと思つて一ヶ月ほどたった頃、その奥さんに事情を全部話しました。料理屋の奥さんは私の話を聞いて「それは可哀想だ。あんたを函館に帰してあげる。でも今は忙しいからお正月が明けてからね」と言ってくれました。そのうち父がお金を取りに来て、今度新潟へ引越すことになったから私を連れて行くというのです。その場は何かお金だけ渡して帰してから奥さんが「又あんたを連れに来たらこまるから私の実家に行つていなさい」と言ってくれて奥さんの実家の芸者屋さんへ行き、そこで台所の手伝いなどしました。

そんな訳で何とか、祖母のいる函館へ帰り、青柳町のブリキ屋兼金物屋の中根家へ女中に入りました。駒ヶ岳の噴火の年でした。中根家は実子が無く養女がいて佇立高女へ通つていました。半年ほどするうち店の仕事もするようになり、集金や帳簿つけも任されるようになりました。奥さんがそこひで目が見えなくなつたものですから。後で実兄からも「学校もろくに行かなかつたのによくそんな仕事できたね」と言われましたが、私はもともと本を読むのが好きでしたから、ごはん炊きをしながら

中根の養女だった人に本を借りて読んだり勉強も教わったりしてました。仕事に必要なことはそんな風にして何とか覚えたんだと思います。若かったからできたんでしょうね。中根の家は金物屋とブリキ屋を兼ねていました。当時は屋根の修理の他えんとつ掃除もブリキ屋の仕事でした。職人もたくさんいました。当時まだめずらしかった電話もありましたので注文を受けたり、金物屋の店の客の応対、集金や帳簿つけと大忙しでした。私が体具合が悪くて休んだりすると三人分の手が足りなくなると言われました。

養 女 に

中根の養女が高女二年の時、結核で亡くなりました。そこで私を養女に、という話になったのですが、養女のかかりつけのお医者さんと、中根の檀家寺のお坊さんに相談して決めたようです。あんたしかいないんだよと言われました。私は、そんな責任の重いことはとても引受けられないと思ったのですが、七飯のまごばあさんに相談したら、せつかく言ってくれたのだしこんなに望まれ

ているのだからこの家の子になりなさい、と言われ決心しました。籍のことですが、五十嵐の家とはずっと音信不通の状態でしたから籍はそのままでした。中根の家へ来て二年ほどたった十七才の時のことです。それまでは一ヶ月五円の給料をもらっていましたがそれがなくなり、かわりにお金は自由に使っていていいと言われましたが、そう言われても映画を観に行く訳でもなし遊びにも行かないので使うことはありませんでした。

結 婚

昭和九年の大火の後、ブリキ屋の仕事は急に忙しくなつて職人も増えました。家がどんどん建てられたからです。職人がたくさん集まってきた中に、後に夫になる問谷とやもいました。問谷はカラフトの人でした。以前、中根の家は広かったので二階を間貸ししてまして、そこに住んでいた老夫婦からカラフトのことは聞いたことがありません。「魚はなんぼでもとれるが野菜がない。冬はひどく寒くて恐ろしいところだ」という話して、その時カラフトは恐ろしい所だと思いましたがでもまさか自分がそこへ



—沖縄旅行の折北風碑前にて—
(昭和52年)

行くことになるとは夢にも思っていませんでした。

問谷は仕事がいよいよ真面目だということでも中根の父には気に入られていました。そこへ問谷が「自分は長男だが家は継がず函館で開業したい。どこか適当な店はないだろうか」と当時同業組合の組合長だった中根の父に相談をもちかけたのです。そこで父が「自分も年だから(当時六十才くらい)跡取りがほしい。店を出すのなら娘と結婚してうちの店を継いでくれないか」と問谷に言い本人も承知したらしいのです。私はとんでもないと思いい、嫌でたまりませんでした。問谷は大人しくみえるが陰気な人で、職人たちがみんなで冗談を言ってもニコリ

ともしない人
でしたから内
心嫌な人だと
思っていました
た。それに職
人というもの
はものの考え
が狭いのです。
自分の腕一本

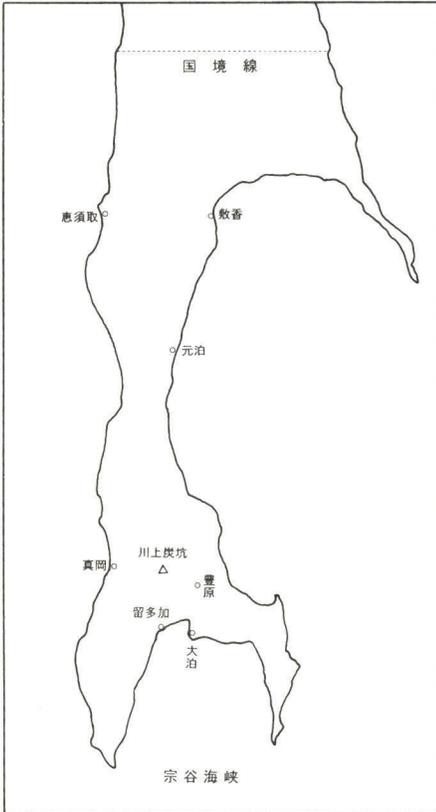
でどんなことでもできると思っていますから。私は何とか反対してもらおうと思いい七飯の祖母に助けを求めつもりで来てもらいましたが逆に説得されてしまいました。祖母は養女の話の時と同じように今度も、せっかくなまれているのだから、というのです。祖母にしてみれば、今まで可愛いがつてもらった恩のある家に逆らえば私が居づらくなるし自分も立場が無くなると思ったのでしよう。私はもう断り切れないと思いいよっぽど逃げようと思いいましたが、世話になった中根の父母に悪いし、まごばあさんにも迷惑をかけると思うとそれもできず思いいとどまりました。

結婚は私が二十一才、問谷が二十四才の時でした。結婚式の時、問谷の母がカラフトから来て、長男だから帰ってきてもらわなければ困ると言ったのでびっくりしました。問谷が両親にきちんと話をしていなかったのです。それから間もなく帰って来いという矢の催促です。とうとうカラフトへ行くことになりました。親類の小学生の子を中根の養子にして、仕事の方は女中さんを雇って覚えさせ何とか格好をつけました。結婚して半年後のことです。中根の両親にしてみれば跡取りにするつもりで私

を問谷と結婚させたのですから、あてが外れてほんとうにがっかりしたと思います。

カラフトへ

カラフトへ発つという時、中根の母が私に二百円くれました。当時は大金です。これで逃げて来いということかと思いました。昭和十一年の三月でした。汽車が岩見



一戦前の南樺太略図一

沢で乗り替えのため一時停車した時、逃げようかと思いましたが、でも見も知らぬ土地です。それに逃げてもすぐ連れ戻されると思うとそれもできません。当時は裁判でも何でも女だけが罪にされるそんな時代でしたから。

とうとう稚内に着きました。外はひどい雪と氷でした。恐ろしい所へ行くのだと思いました。連絡船（稚泊連絡船）に乗って八時間かけて大泊へ着いた時、海は一面氷の山でした。船は岩壁には着かず、乗客は梯子で氷の上

に降りてその上を歩いて棧橋へ上りました。問谷の父は
国鉄に勤めていたので、一家は豊原の鉄道官舎に住んで
いましたが、二部屋よりありませんでした。そこへ両親
と弟と妹、それに私たち夫婦が暫く暮らしました。着い
てすぐ、雪の中なので外の仕事がなく、問谷は少しの間
留多加に出稼ぎに行き、まもなく豊原から汽車で三時間
ほどの川上炭坑に出稼ぎに行きました。そのうち豊原の
中心部に店がみつきりそこへ引越してブリキ屋を開業し
た訳です。

カラフトのくらし

着いた時から寒さには驚きましたが、冬場の寒さといっ
たらなかったです。雪が三日も止まないんですから。屋
根まで積もって隣の家も見えなくなるんです。人の姿は
足より見えません。雪が固くなってスコップは使えませ
んから鋸で氷を切るようにして四角く切り出して家の脇
に積むんです。外を歩くにも寒いので風呂敷で顔を蔽っ
て歩くんですが吐く息が凍って風呂敷もバリバリになり
ました。夜、ストーブを消している時など柱がピンピン

と音をたてて跳ね上るんです。それでも住んでいるうち
に人口も増えてきましたし、寒さにも慣れてきました。
でも九月といたらもう冬仕度です。夏の姿は一週間く
らいのもでしたよ。ただ、燃料は豊富でした。カラフ
トは石炭も豊富でしたが、うちの近くには木工場があり
のこくずがたくさん出たんです。うちは商売ですから、
のこくずを焚くストーブを作って、夏の間、のこくずを
もらってきて倉庫にびっしり詰めておいたので冬の燃料
は無料ですみました。食料も魚は豊富でした。ニシンは
函館では一箱が二十円もしたのにこちらでは十五銭か二
十銭で、まるでタダみたいなものでした。日本酒も函館
では一級が五円くらいだったと思いますがカラフトでは
一円二十銭ほどで、何でもここは税金がかからないから
ということでしたが、まるで別世界みたいだと思っただ
のです。

姑のこゝと

カラフトへ行くことになった時、中根の母が「姑さん
というものは恐ろしいものだから気をつけなさい」と言っ

たのですが、その時は意味がわかりませんでした。同じ人間なのにどうしてなのだろうと思つたくらいです。カラフトに行つてみてはじめて母の言つたことの意味がしみみわかりました。夫が出稼ぎに行つて姑と暮らしていた時、手袋を編めと言われました。私はずっと働いてばかりいましたから裁縫も編物もしたことがなく、それで姑に教えられて編んだんですが、それが大きすぎて使ひものになりません。姑がわざと目を多く教えたんです。又、姑がどこかに置き忘れたお金を私が取つたのではないかと疑われたこともありました。ほんとうに切ない思ひをしました。水道が無くて水は共同の鉄管に汲みに行つてカメに貯めておくのですが、その水汲みが弟の仕事だつたのが弟が行かないので私がすることになりました。冷たい所での慣れない力仕事で、最初の子は流産してしまいました。店を持って引越してから子供が生まれましたがお産扱いに姑に来てもらいましたら産後の三日目から起きろと言われました。一月の寒い時で腰が痛くなりました。お産婆さんが驚いて「何と言われても寝ていなさい」と言つてくれましたが、今度は寝ている枕元へ来てあることないこついやみを言われ、心労から一時目が見

えなくなりました。それに懲りて二人目からは「いいです」と断つて隣近所の人に手伝つてもらつたりしました。カラフトで五人の子を産みましたがお産のたび辛い思ひをしました。昭和十一年に長男、十三年に長女、十五年に二男、十九年に二女が産まれましたが下の子二人をカラフトで亡くしました。

三男が二才の時病気で医者に見放され、別の病院に連れて行こうとしている時、姑がその頃新興宗教に凝つていて、神様にこの子を治してもらおうのだと馬車で姑の家に連れて行ってしまったのです。私はそんなもので病氣は治らないからと子供を返してもらいに行つたのですが錠をかけて中には入れてもらえません。中でお祓いをしていたのですがそうこうしているうちに子供は死んでしまったのです。まるで殺しに連れていったようなものでした。情けなくて辛くて、その時線路に身を投げて死のうと思ひました。でも上の子たちが居ることを思えば死ぬに死ねませんでした。本当に切なかつたです。

戦争中のこと

開戦はラジオで知りました。十二月初めで外は吹雪でした。小さい子がいて外地暮しな訳ですし、これからどうなるのかと思うとそれは心細かったですよ。四人目が生まれた昭和十七年ころ、隣組の役員をしました。町会から貴金属や座布団を供出しろと言われ、国債も何度か買われました。防空訓練でバケツリレーもありました。私はカラフトの氣候のせいか病気がちでしたので出たことはありません。学校に町会の人たちを集めて役所の人を育てることが大事だ。飛行機なら一ト月でできるが人間は二十年かかる。これからは老人や役に立たないものには食べさせないで子供に多く食べさせるように」と言ったのです。とんでもないことを言うと思つて腹が立ちました。町会からは、ソ連兵が入ってきた時自害するように刃物を用意しておけとも言われました。その時、これはろくなことにはならない、こんな戦争に協力することはよくないとうすうすですが感じました。私は役所から言われても隣組の人たちにはなるべく供出させないようにし、国債も、買えない人もいるからと返させたりしました。警防団ができて夫も駆りだされました。豊原

にも空襲があり焼夷弾を落とされて家が焼けましたが、防空壕をつくつてあつたので大事なものは避難させてありましたし、疎開するつもりで家は建ててあつたので不自由はしませんでした。ただ暫くは自動車の音を聞いても空襲かと思ひました。

敗 戦

玉音放送は家で聞きました。雑音でよく聞き取れませんでした。が敗戦になつたことはわかりました。何しろ外地ですから、ソ連軍がやってくるのではないかと、本土へ帰れるのだろうか、と思ひ不安でした。半月ほどの間に役所や町会の上の人たちは挨拶もなく黙つて引揚げていてしまいました。密航して帰つたのではないのでしょうか。間もなく豊原にもソ連兵がやってきました。ジープに乗つて銃を構えた姿は恐ろしかったですよ。ソ連の管理下になつても食料は不自由はしませんでした。留多加にあつた日本軍の食料倉庫をソ連軍が没収して食料を配給したからです。主人は技術屋でしたから仕事はありましたが。ソ連が接収した工場に勤めて給料をもらひ生活でき

たのです。そのうちソ連本土から民間人が移住してきて、引揚げで空き家になった家を改造して住み始めました。隣の家にもソ連人一家が引越してきました。子供が二人いて主人は工場勤めの作業員でした。奥さんがとてもいい人で何かにつけ助けられました。日本人は正直で穏やかだとみられていましたし、「ヤポンスキは頭がいい」ということで信頼されていました。言葉は、最初は何を言っているのかわかりませんでした。ソ連兵がやってきて、物干しに干してある布団をみて、「シコロコ・シコロコ」というので恐ろしくて逃げまわっていたのですが、「いくらか？」という意味だと後でわかりました。暮らしているうち言葉もだんだんに聞き慣れてきました。食料は配給はありましたがそれだけでは足りず、バザールと呼ばれる市に買いに行きました。値段は高かったですバザールに行けば何でもありました。

となりのマダムのこと

最初カラフトに入った兵隊は囚人が多かつたらしいです。一度、ソ連兵が入ってきて畳の上に土足で上って

きたことがありました。隣のマダムが、「兵隊が悪いことをしたら言いなさい」と言ってくれていたので隣に頼みに行ったら中学生の子供を寄こしました。その子が来て、ふたことみこと話したら兵隊はさっさと行ってしまったので助かりました。又こんなこともありました。ソ連兵が一人入ってきて、大泊へ行くのに吹雪で汽車が止まってしまったので一晩泊めてくれ、と言うのです。私は気の毒だから泊めてあげるつもりでいたのですが、その頃姑が同居してまして姑が奥の部屋で「何でソ連兵を泊めるのか」とひどく怒ったのです。兵隊は言葉はわからないなりに雰囲気でわかつたらしく、誰か怒っているが何とか泊めてくれと重ねて言うので、また隣のマダムに来てもらって、マダムから「何もわるいことをしない」と言ってもらいました。その時、兵隊が玄関で脱いだ靴を持って上ろうとするのでマダムが「ヤポンスキは靴を盗まないから安心してここへ置いておいていい」と言いました。盗みをしたくないということでも日本人は信用されていたようでした。

姑のことでも隣のマダムは見えて何となくわかつたのでしよう。ソ連でも同じだと言っていました。おばあ

さんのことをスタルガというのですが、「スタルガは私が少しでも多く食べると、すごい目をしてにらんだ」と言うのです。ソ連でも日本でも嫁姑の問題はどこにでもあ
るのだと思います。隣のマダムは本当にいい人でした。
昭和十九年に生まれた末の子が病弱で三才で亡くなった
のですがその時、あちらでは香典の習慣がないのでかわ
りにお供え物を持ってきてくれました。近所の人が来て
話している時、誰かが笑ったりすると、「この家では不
幸があつたのだから笑うもんじゃない」と言ってくれた
りもしました。そんな風でしたから引揚げの時、ずいぶ
ん引き止められました。日本に帰っても食料もないとい
うし、帰らないでここにいなさいと何度も言ってくれま
したが、日本がどうなっているのか私は昔のことしか頭
にないしやはり生まれ育つた場所ですし、帰りたいと思
い引揚げの申請をしました。

カラフトのソ連人社会

戦後のカラフトでは病院も保育所も無料でした。私は
病弱でしたから入院もしたのですが無料でしたし、長女

が近所の保育園に行つて弟を入れてほしいとたのんだら、
すぐに来ていいと言われてめんどうな手続きもお金もい
らなくて助かりました。ソ連の人々は日本のように貯え
るということをしません。今日あるものは今日のうちに
食べてしまうのです。明日からの食べ物が無ければ困る
でしょうと言うと、明日は又配給になるからいいと言う
のです。大らかなものだと思います。ただ日常の物資
は不足していてとても物を大事に使いました。水も同様
で、貴重品のような扱いでした。うちは商売なので大き
な金盥を注文されて作りました。赤ちゃんを洗う時、そ
れにヤカン一つ分のお湯を入れてそのお湯で体を温ため、
茶碗にお湯を汲んで口に含み、ぶうっと体に吹きつける
のだそうです。よく風邪をひかないものだと思います。
コップ一杯の水で口もすすげば顔も洗います。私たち日
本人が洗面器にたっぷり水を入れて使うともったいない
と言われました。日本人とよく物々交換しましたが、鉛
筆や万年筆・時計などがあちらの人々には喜ばれまし
たし、又女の人の赤いおこしや襦袢もめずらしがられま
した。

親しくなったソ連人に、戦争した相手の国の国民とつ

き合うのは嫌じゃないかと聞いてみたことがありました。そうしたら「戦争はミカドがした事で、あなた方一般人には関係ないことだから」と言われました。よくソ連のことを悪く言う人がいますが、あれもやっぱりソ連の上の方の人が悪いのでソ連の人民が悪いのではないと私も思います。

引揚げ

問谷は結婚しても籍は入れてくれませんでした。でも私の方もいつかは別れようと思っていましたから籍のことは気にしませんでした。引揚げの時、私の身分証明書の方に子供三人の名を書き入れました。引揚げのことでいろいろなデマがとびました。お金や物をソ連に没収されるといううわさでした。どこまで本当かわからず不安でしたが私の場合は幸運でした。役所へ行って、病弱だし子供もいるから引揚げを許可してほしいと言ったら次の日にもう帰っていいと言われました。船は大泊ではなく真岡からでしたが、真岡に着いてから一ト月も待たされた人の話を聞いていました。私の場合、真岡に着く

とすぐその日のうちに乗船できました。荷物の検査も簡単でソ連のルーブルだけ置いていけと言われましたが日本のお金はそっくり持つていっていいと言われました。ほんとうに何のめんどりもなく乗船できたのです。私の後から引揚げた人の中には漬けもの石までもつてきた人もあったそうですよ。そんな訳で引揚げを機に夫と別れ子供三人と函館に帰ってくることになりました。昭和二十二年のことです。十一年間のカラフトぐらしでしたが私にとっては五十年も暮した気がします。

引揚げその後

日本に上陸してからがむしろ大変でした。縁故者がある者と無い者とに分けられたのですが、私は考えて無縁故の方に入りました。親類もあったのですが、病気がちな上に子供三人をつれてやっかいになるのは心苦しかったです。それに国のすることだから何か援助もしてもらえらるだろうと思つたからです。それがひどい待遇を受けました。ついてすぐDDTを全身にかけられ貨物車に乗せられました。荷物もチリ紙のはてまで調べられ

没収されましたしお金も一人二十円以外は没収されました。兵舎にザコ寝させられ、こんなことなら来なければよかつたと思います。北大そばの引揚げ寮に入り、市の救済事業でそれまで経験したことのない肉体労働をすることになります。それが後のニコヨンと呼ばれる失業対策事業となつて（昭和二十四年）以来、四十年あまり働き続けました。全日自労の活動も初期の頃からです。子供が高校へ入る時お金がなくて辛い思いもしました。夫と正式に別れる時、人からもつと慰謝料を請求してはと言われました。でも私は金額はどうでもよかつたのです。ただ私のそれまでの苦勞を子供たちにわかつてほしかつただけですから。働き続けてきて、体は少し不自由ですが、今が一番気楽です。

お わ り に

戦争中の役人の言葉に、戦争は間違っていると感じた五十嵐さん。全日自労の活動家として何度か市役所と団交した時「役所を相手にしてよく恐ろしくないね」と言われたことがあつたという。彼女の答は明快だ。「だって

私たちが主人公でしょ」そう言い切る反骨心には、自ら手で忍従の結婚生活にピリオドを打ち、貧しさの中から三人の子を育てあげた人の持つ芯の強さがのぞく。天皇の赤子としてなすすもなく戦争に巻き込まれたことへの反省の上に、権力に対して、世の中の不合理に対して曇りない確かな目を五十嵐さんは体得していったのだと思う。



—引揚げ直後実姉の家の近くで—
(右、静さん)

(付 記)

敗戦になってすぐ、上に立つ立場の人々が真先に引揚げて行ってしまった(P 57)という話しは、満州引揚げの場合にもよく耳にすることだが、樺太でも同じような状況だったようだ。五十嵐さんの言葉を裏付ける文章を、敗戦直後の豊原に関する証言の一例として挙げておきたい。

―夜も更けて十一時十二時、十六日の午前一時頃ともなると、豊原から大泊へ通ずる国道を、ハイヤー・トラック・バスそういった自動車が恰も総動員でもされたように北から南へ、フルスピードで続く。それは樺太開闢以来の賑やかさ騒々しさだった

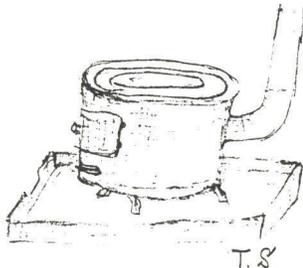
『昨夜から今早朝にかけての、あの自動車はありや何ですか。敗戦の事で頭がモヤモヤしている所へ、夥しい自動車の騒音で、碌々眠れやしませんでしたよ』

『あれですか。あれは、豊原のお偉い方々の家族だそうです。何でも夕べの内に大泊に出て、今朝の連絡

船で内地へ遁れたんですと』―

(「南樺太はどうなったか―一村長の敗戦

始末記」 福家 勇 著より)



T. S.

異国で生きた四十年

日中戦争後、国交断絶の状態だった日本と中国は、一九七二年（昭和四七年）九月国交回復をした。

それをきっかけとして、一九八一年（昭和五六年）三月「中国残留日本人孤児の肉親捜しのための訪日調査」が始まっている。その後、中国に残された日本人の子供たちが、日本に帰った親や兄弟を捜しに続々と日本にやって来た。その身元調査は現在も続いている、一九九〇年（平成二年）二月までの二十次に渡る調査で日本に来た残留孤児は一七二六人であり、このうち六二〇人の身元が判明している。

孤児たちの肉親捜しのための訪日の様子は、テレビ等のマスコミの報道で多くの人々が知っているところと思

うが、それらの報道の陰で戦争当時に大人であったが、混乱の中で中国に残されてしまった女性たちが数多くいる事実は、余り知られていないように思われる。

大場 小夜子

昭和四七年の日中国交回復後、国費で「永住帰国」した人は三一二三人、そのうち孤児は一一五五人、残りの一九六八人の大半が、残留婦人とその配偶者と見られる。一時帰国者は、再び中国の家族のもとへ戻っている。中国残留婦人は、厚生省の推定は二〇〇〇人だが、実際はもっと多く三〇〇〇人は確実にいると見られている。

（『忘れられた女たち』より）

実際の数字が確定的でないのは、国が調査に対して消極的だからではないか。調査を綿密に行なえば、もっとその数は増えるのではないだろうか。軍人や、軍に随行していた看護婦なども、終戦時逃げおくられてそのまま中国に残留した人が大勢いると思われる。それらの人々は、中国の国情のために日本人であることを隠さなければならなかった人もいたろうし、また、当時避難したところが、山間部などでそのままの地に住みついている人もいて、その辺りはテレビ、ラジオ等がほとんどなく、残留日本人捜しの情報がはいつてこなかったということも考えられる。

また、厚生省は残留婦人と孤児とを、当時の年令が十才以上であれば残留婦人として区別しているのである。そして、十三才以上であれば日本語も話せるし、自分の意思で帰ることはできたはずだと考えているのである。しかし、彼女たちは帰る意思が無かったから、そのまま中国に居残ったのだろうか。そう判断してよいのだろうか。着のみ着のまま逃げてくるのだから、帰国の費用を用意するのも困難だったろうし、中国人と結婚した人も多いなど、様々な理由のために残留しなければならな

かったと思えるのだが。厚生省の出した結論は早急すぎなのではないだろうか。

あまり知られていないことだが、函館に中国から帰国した残留日本人のための「日本語教室」がある。その教室で、四年前に中国から帰国した浜長さん一家が、日本語の勉強をしている。おとうさんの浜長健さん、おかあさんの韓桂琴さん、そして五人の子供たちが勉強しているのである。その浜長健さんの母フジさんが、戦前中国に渡りそのまま日本に戻れず、中国に残留を余儀なくされた残留婦人だったのである。

浜長フジさん(旧姓鈴木)は、一九一六年(大正五年)森町で生まれた。その後すぐ函館に移って、小学校は松風小学校に通った。学校を卒業後は、新川町にあった「目黒病院」で看護婦として働いた。

一九三六年(昭和十一年)漁師をしていた三治さんと結婚し、小舟町(現入舟町)に住んだ。一九三七年(昭和十二年)には長男健さん、三年後に長女紀子さん、そして次女の邦子さんも生まれた。

漁師は収入も良く、生活の苦勞は経験することもない

く順調な暮らしだった。そんなとき、中国牡丹江で漬物会社を経営しているフジさんの兄に、兄の会社で働くことを勧められたのである。経済的には不自由のない漁師だが、身の危険が常に付きまとう仕事であって、いつ何が起きるかわからない、などいろいろ考えた結果、牡丹江に行くことにした。それは一九四〇年（昭和十五年）のことで、日本は国を挙げて戦争一色になりつつある時期

昭和十八年頃の浜長さん一家



だった。しかし、母親も兄一家と一緒に暮らしていたので、なんの不安も抱かずに牡丹江行きを決めたそうだ。牡丹江での生活が穏やかに過ぎていったその頃、第二次大戦は徐々に激化していった、気が付けばまわりいた男たちが、どんどん召集されていった。兄、そして夫も。兄も夫も、三十才を半ば以上過ぎてからの召集であった。

夫が召集されて間もない一九四五年八月九日、ソ連が参戦し、フジさんたちの住んでいた辺りに、ソ連からの爆撃が始まった。近くの小学校がやられて、危険な状態になったため、緊急に避難しなければならなくなった。一刻の猶予もない状態だった。

寧安で橋が壊されないうちに、ハルビンの方に逃げなければならぬ。母と一緒に逃げるつもりで、兄の家に行ったところ、そこには母も兄嫁も既にいなかった。牡丹江の駅に逃げて行ったのだと思ひ、今度は駅の方に行くこと、そこは、人、人、人でそれはひどい混乱の状態だった。もう、母たちはここから出ておいた子供たちをフジさんは、自宅に帰り、留守番をさせておいた子供たちを連れて、逃げる支度をした。なんとしてでも日本に帰り

たかったという。そのときフジさんは妊娠中だった。八ヶ月の身重の体で八才の健さんと六才の紀子さん、そして背中には一才七ヶ月の邦子さんがいて、思うように行動出来なかったが、逃げなければどうなるかわからない逼迫した状況だった。看護婦の経験を生かして逃げていくとき、出産の手伝いをなん度かした。着物を囲いにして、そこで出産する人もいた。

なんとしてでも日本に帰りたいと、それだけを思っていたが、逃げていくあいだ、南湖頭にいたときに日本の敗戦を知った。そして、結局、ソ連軍に捕らえられてしまい、自行村にあった日本の開拓団の、そのときは無人になっているところに入れられたのである。ここでは、現金を持っているものは現金を、時計などの貴重品を持っている者は、それらを狙われた。日本人が開拓した村なので、近くに畑もありそこに食料にする野菜をとりに行った。日本人のものだった畑の野菜を、今は泥棒のようにとりに行ったのだった。昼は、今まで、日本人に抑圧されていた中国人が畑を見張っているの、夜でなければとりに行けなかった。

育ち盛りの小さい子供を抱えたフジさんは、とにかく

食べ物が必要だった。近くの中国人の農家の手伝いなどをして現金を得て、それで子供たちになんとか食べさせられることはできたが、自分の分まではなかなか手に入れることはできなかった。妊娠中の体であるから、栄養のあるものは必要だったが、それが出来なかった。

毎日が、食べ物も満足にない状態の生活だったから、一日に三十人もの子供が死んだときもあった。栄養失調のため、チフスなど病気がはやるとすぐひろまった。一番下の子の邦子さんも、風邪がもとで亡くなってしまった。まだ二才にもなっていないかった。

子供を亡くしても嘆き悲しんでいられる状況ではなかった。子供を生むためにも、収入を得なければならぬので、その村から出て、東京城トウキョウという街に行った。そこには大勢の日本人が住んでいた食料倉庫があって、フジさんたちもそこに住むことにした。その街で豆腐売りなどをして、少しでも収入を得ようと働いたのである。そして、十月三十一日、やっと得たお金でお産のために、一日だけ旅館の一室を借りて子供を生んだのだった。助産婦がいるわけでもなく、自力で産んで、自分でお産の処理もしたのだった。生まれた子供はお湯で体をふいてやつ

た。男の子だった。健さんが、その赤ちゃんをとっても可愛がり面倒をよくみたので、亡くなったときはそれは悲しんだそうだ。

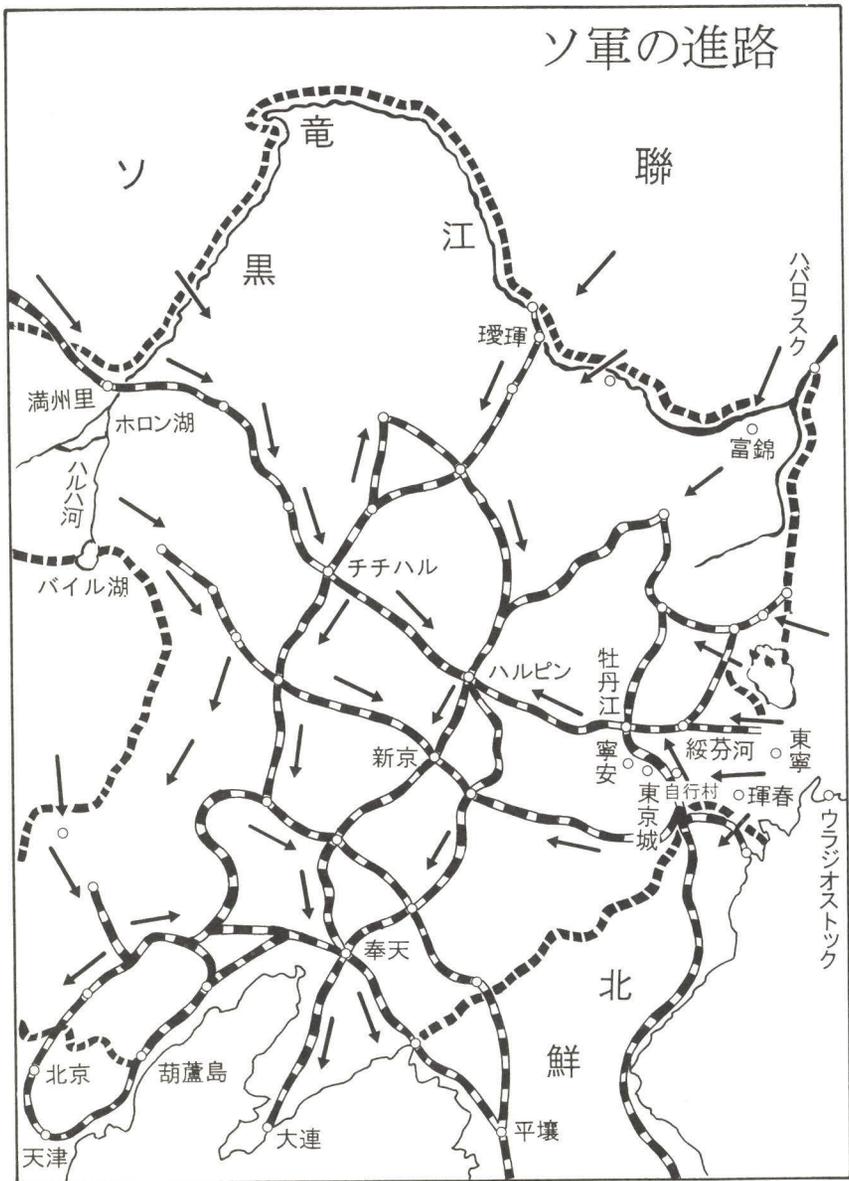
日本へ帰る機会を失い、二人の子供とともにフジさんは、女ひとり異国の土地で生きて行かねばならなかった。次々と亡くした二人の子供のことを悲しんでいる間もなく、生きるために仕事をしなければならなかった。昼は農家の手伝い、夜は近所の人の縫い物をして家族三人の生活を支えて行ったのである。

それらの状況の中で、中国は共産党政府が成立し、国全体が様々な試みをするようになって、その中で看護婦や産婆を養成することになり、フジさんにもそういう誘いがかかった。当時、中国人は文盲が多かったので字の読み書きのできるフジさんに、その機会が与えられたのだそう。日本人だからその機会を与えないということはない。

そこで、産婆の勉強をし、その資格をとったフジさんは近所の助産婦として、お産の面倒を見るようになり、それが一家の収入として生計の助けとなった。生活は決して楽ではなかったが、少しずつ安定してきたのである。

そういう生活の中で、健さんは九才で小学校に入学した。健さんは成績が良く、上級の学校に入学することを本人も希望したし、学校の先生にも勧められたが、母ひとりの収入で暮らしている一家にとって、それは難しく結局中学までしか行かせることはできなかった。

人は、あまりの苦勞を味わうとむしろ涙も流さなくなるのかもしれない。フジさんの口調は淡々として、あくまで穏やかだった。フジさんが、様々な苦勞を乗り越えてこれたそのエネルギーの源は、「日本に絶対に帰るんだ」という、その切なる思いだったようにうかがえる。フジさんは言う「死のうなんて、絶対考えませんでした。必ず日本に帰る。そう思い続けてきました」と。そのように思い続けていたフジさんに、日本に帰る機会がめぐってきたのは、中国に当時首相だった田中角栄がやってきて、ようやく中国と日本の国交が回復したときからだ。まず、故郷である函館市に手紙を出した。兄はシベリアで、弟はアツツ島で戦死しているので、そのことを書けば調査しやすいのではと思ひ、そのことも書き加えた。しかし、二年間待ったが返事は来なかった。フジさ



メルヘン社発行の地図参照
 図中の新京と奉天は旧呼称である。

三、体験記

歴史のかけで

—ある娘のはなし—

田 尻 聡 子

の意志で選ぶ暇もなく巨大なうねりに呑み込まれ抗う術なく唯々流された人達が多かった。

京 都 空 襲

昭和三〇年（一九五五）に指定された西海国立公園は佐世保から平戸まで連なる九十九島と平戸諸島、五島列島など大小約四百の島々が紺碧の海に浮かぶ景勝の地である。

昭和二一年（一九四六）中国の葫蘆島を出た引揚船が懐しい故国の玄関で最初に眼にしたのがこの九十九島の緑の島々であった。身も心も傷つき疲れきって帰って来た引揚者が国・敗れても斯くも麗しい山河があつことを知りどれ程涙したことか…引揚船には自分の人生を自分

戦後の戦争秘話の一つとして今次大戦でアメリカ空軍は京都、奈良、鎌倉を爆撃しなかつたとの伝説が信ぜられ、長い間、多くの人々により語りつがれてきた。日本を代表する三都市の歴史的遺産は人類共通の文化遺産とみなす米国の人道主義の所産であったと賞讃された。極く最近のことだが高名な評論家加藤周一氏が「夕陽妄語」で京都の文化遺産が守られたのは米空軍が爆撃目標から

除外したからと、のべられている（一九九〇年十二月十三日、朝日新聞）。この美談には日米両国の文化人があずかって力となったとも言われてきた。日本人側として知られているのは、物理学者嵯峨根遠吉博士で米国の友人を介し米空軍へ働きかけた由、何れにしろ千年の都、京都のたたずまいが残ったのはアメリカの良識と善意の賜物であったとの通説が流布してきた。昭和四七年（一九七二）京都宗教者平和協議会が初めて京都空襲の事実を発表した時、世界のマスコミの驚きとショックは大きくUPI通信が直ちに海外へその衝撃を報道した。四九年（一九七四）発行による京都空襲を記録する会の「かくされていた京都空襲―京都空襲の体験と記録」では、京都がはじめて空襲を受けたのは昭和二〇年、敗戦の八ヶ月前、日米両国の勝敗の帰すうは既に定まっていた一月十六日である。その後、無条件降伏する直前の七月三十日まで京都府内を含めると前後三九回、判明している死者三〇二人、負傷者五六一名、全・半倒壊家屋七〇〇余その殆どが一般市街地であった。一月十六日の第一次空襲時には死者四一名、負傷者四八名、被害家屋三二六戸、被災者七二九名を出している。倒壊した建物の一つに京

都女子専門学校、第三小松寮がある。女専のキャンパスは知恩院、豊国神社に隣接する東山七条にあり、当時、国文科・家政科・東亜科（英文科は敵性語との理由から廃止となり代わって東亜科が新設されマレー語などが教えられていた）の各校舎・講堂・学生寮として錦華寮・第一・第二・第三小松寮があった。女専は昭和二三年、戦後の学制改革で京都女子大学となった。その大学関係者の一人が「記録する会」に次の文を寄せている。題は「第三小松寮にモロトフのパン箒が―」である。（モロトフのパン箒とは小型の集束爆弾の綽名であった）

「前略……金子先生がこられ慌しく「第三小松寮がやられ寮生が下敷きになっている」と、告げられたので現場へ走った。警防団と寮生が見えない寮友の救助に必死の働きをしていた。うず高く積まれた柱、壁土、板、瓦などの取りのけを懸命に続けた。誰かが「ああ！この下で声がある」と、無事を念じ邪魔物を取りのぞいた。「いた！いた！」頭からすっぽり壁土を浴びた一寮生が背中を丸くして這いつくばる格好で現われた。寮生が泣き乍がら寄り、静かに抱きかかえた。外傷はかすり傷程度で寮生全員無

事であったのは真に幸運であった―後略―と、ある。

この後、同室の友の救出にあたった一寮生（筆者）は防空頭巾の下を流れる赤いものに気付き修道国民学校仮設救護所へ運ばれ、夜のあけるのを待ち京都府立医大脳外科へ移された。爆風による熱傷と頭部裂傷で、その後二ヶ月間、身動きできぬ入院生活を余儀なくされた。

昭和五〇年（一九七五）全国戦災傷害者連絡会の手により「戦争の語り部として―民間戦災傷害者の三十年の本が世に出た。空襲での戦災都市は全国で一・一三、罹災人口は九六四万人、死者五十一万人、倒壊家屋一、四〇〇万、のうち焼失した住宅は二三〇万戸とある。道内の戦災都市として函館・室蘭・釧路・根室の名がみえる。しかし三〇数回空襲を受けた京都のことは一行の記録記事さえない。「最早、戦後ではない……」と高らかに世に宣言されたのは昭和三〇年代。この頃すでに自由にものが言える様な社会的状況が醸成されつつあったにもかかわらず京都空襲の実態は語られなかった。何故、この歴史的事実を正視し得なかったのか。京都空襲を記録する会理事長藤谷俊雄氏は次の様に語っている。(一)は戦時

中、空襲被害は軍事秘密に属し殆ど公表されなかったから、と。(しかし他都市では戦後、次々に空襲の記録を発掘し上梓している……)(二)は戦後、日本は米軍の占領下にあり、その米国の良識により京都は空襲をまぬがれたと強調され、あえて事実をあきらかにすることが憚られた―と、ある。

歴史的な神話はこうしてつくられた。

戦争と女

若い体の回復は速かった。だが医薬品の乏しさから、化膿した頭の傷は仲々治らなかった。当時満州にいた両親から東寧（現黒龍江省内）の陸軍病院で治療するようにと言われ渡満への道を選んだ。空襲で学生服も書籍も失い友人からもらったモンペ姿で三月満州へたった。あと数ヶ月の後、満州全土が戦火に包まるとは露ほども予測し得なかったのか、両親はためらいもなく娘を呼び寄せた。概ね在満の民間邦人は内地の痛みも知らぬげに安穩な日々をおくっていた。家で働いていた中国人の張少年とロシア人のワーシャーは東寧と最短距離にあるウ

ラヂオのラヂオ放送をきき「日本、負けそう……」と、声をひそめて言っていた。大人達はそんな話を耳にしよものなら「バカなことを言うな」と言下にしりぞけた。頭の傷が癒えた五月、女専への復学を準備したが関釜連絡船（下関・釜山間）航路はすでに杜絶していた。国境の街、東寧でもできる勉強として、ロシア語学習をこころざし、勉強の手段上東寧特務機関に入った。機関長は軍服の陸軍大尉で他に数名の軍属がおり全員男だけだった。その他に多数の覆面作業員がいた。日本人ばかりでなく中国人、朝鮮人、ロシア人、蒙古人、少数民族等、民族、人種も多様であった、ソ連軍侵攻の一ヶ月程前、作業員二名がソ連領への逃亡を計った。ロシア人男女で国境線の河を渡りきる寸前、日本軍にとらえられ川原で射殺された。二重スパイだったとも聞かされた。後日、現場写真が機関内で公開された。女はブラウスとスカート姿の金髪の若い子であった。写真の殆どが女の子の裸体写真で足を開かせ様々の角度からうつしていた。川の水で体にくっついていたのであろう服と下着を無理にはがしレンズをジーンと覗き込む無気味な男の顔が目には浮かぶ、そんな記録写真であった。

東寧特務機関の勤務は僅か二ヶ月余りなので、その詳細は知る由もない。記憶していることと言えば東寧特務機関は牡丹江特務機関の指揮下にあり、牡丹江特務機関は関東軍情報部、通称ハルピン特務機関隷下の地方支部であった。満州には十数ヶ所の地方支部があったと思う。関東軍情報部は大正八年（一九一九）シベリア出兵に際し創設された。特務機関の主たる任務は情報蒐集・諜報・謀略・防諜活動とうであった。

運命の日、八月九日がやってきた。朝から雲一つない快晴であった。ソ連の大軍が満州の東部・北部・西部の国境線を破り疾風怒濤の勢いで攻めてきた。

児島襄著の「満州帝国」（文春文庫）Ⅲによれば、この時ソ連軍が満ソ国境に展開した兵力は一五七万余、火炮二万六〇〇余、戦車・自走砲五五〇〇余、飛行機三五〇〇余機であった。これをむかえうたなければならぬ。関東軍は僅か七五万であった、このうち二〇万は終戦の一月月前「対露作戦計画」にもとづき増強された、所謂、根こそぎ動員者で、その殆どが在満邦人である。その頃在満邦人成年男子は三〇万であったから、そのうち $\frac{2}{3}$ が召集されたことになる。この根こそぎ動員こそ、ソ連軍

侵攻により国家からも関東軍からも見はなされ、あまつさえ一家の杖とも柱ともたのむ夫・父を失った避難民の悲劇を増幅させ凄惨な地獄へおくりこんだ要因の一つと言えるだろう、在滿根こそぎ動員者の平均年令は三〇から四〇才で銃を一度も握ることなくシベリアおくりとなつた人は数知れない。七五万の関東軍の実態は兵力ともに極度に貧弱であつた。当時の規定による装備を保持する部隊は皆無で、最も充足率の高い第三九師団が八〇%、根こそぎ動員で編成された八個師団は十五%で最低の装備である小銃ですら十人に三挺の部隊があつたと。

ソ連が具体的な対日作戦を検討しはじめたのは一九四五年ヤルタ会談（二月）以前で、三月には兵力の東送を開始し「極東ソ連軍総司令部」が設置された。同五月、ドイツの降伏により、ヨーロッパ戦線が終結し極東への軍の移動が加速化した。この同じ五月、関東軍は新京（現長春）で満州国政府要人と「非常時対策会議」を開いている。政府要人はここで初めて関東軍の実態を知り慌て驚いたという。一般邦人の認識度は推して知るべしであつたろう。この席上奥地の老幼婦女、及び国境付近の開拓団民の引揚げが議題にのぼつたが関東軍は軍の企図が暴

露され政治的にも士氣の面でも悪影響が予想されるとし拒否している。在滿の一般邦人は当初より見ごろにする方針であつたことがうかがえる。満州国皇帝、溥儀は著書の「我的前半生」で当時を次の言葉で回想している「蘇聯^{ソビエト}の出兵不過是時間上的問題」であると…。

ソ連軍は文字通り無人の曠野を進むかの如く無敵の勢いで、またたく間に満州を席卷した。八月九日午前零時、関東軍司令部が受けた第一報は「東寧^{とうねい}、綏芬河^{すいぶんが}正面の敵は攻撃を開始せり」であつた。（注69ページ地図参照）

その日、午前三時頃、家の電話が鳴つた。特務機関の非常呼集であつた。前日の八月八日、機関長は緊急会議で出張し不在、このため軍属の部長が代わつて指揮をとつていた。娘に課せられた任務はおびただしい情報資料の焼却だった。迫撃砲が大音響と共に街の各所で炸裂している。日本人が慌しく避難し始めた。ワシヤーが危険をおかして知らせてくれた。家族が街の人々と共にすずに避難したと…。夕刻、電話、電信、電気等の都市機能が完全にストップし闇の中で手さぐりの残務処理が続いていた。突然、部長より「東寧発最後の貨車で街を離れる様」命ぜられた、女の子がいては作戦行動の邪魔にな

るとの理由からだつた。手足まといになる者なら何故、明るいうちに家族の許へ歸してくれなかつたのか、この期に及んで仲間をすてるとは——と、非情な仕打ちが、うらめしく、急に涙が溢れた。

八月九日早朝、夏服で家を出た娘が肉親に再会できたのは十一月、初冬の新京市に於いてであつた。父親は到底生きてはいまいと諦めていた子を目の前にし声を殺して男泣きした。嘆きも涙も枯れ果てた娘は泣けなかつた。東寧から寧安そして牡丹江までは屍臭漂う、まさに鬼哭しゅうしゅうたる野山を這いまわつた。牡丹江からハルピン・そして新京（現長春）までの避難行も平坦な道筋である筈がなかつた。マンドリン（自動小銃）をかまえたソ連兵が群がって暴行をほしい仮にしていた。日本へ積年の恨みつらみを持つ中国人、朝鮮農民も又、鎌をふりかざし弱つた女達を草むらにおし倒した。同胞の女達を守つてよい筈の日本の敗残兵までか明日の命はわからぬと、うそぶき、おそいかかつてきた。いくさとは一朝にして既成の秩序を崩壊させ平和の里を修羅と化し、人をして限りなく空しい狂人に至らしむるものなのか—子供と老人は捨てられ殺され女は果てることなく犯

された。

その頃、晩秋の野面を肩をおとした日本兵が北を指し隊列を組み過ぎ去つていった。

佐世保検査所

昭和二〇年（一九四五）八月十五日の敗戦と同時に海外に残された邦人の引き揚げが始まつた。厚生省は引揚者により伝染病が国内へ持ち込まれないようにと、引揚指定港である舞鶴、浦賀、博多、佐世保に夫々検査所を設置した。佐世保検査所は本土を距る二百米対岸、針尾島の浦頭であつた。翌二一年八月二二日、駆逐艦「樫」で葫蘆島を出た四七七名の引揚者が故国への第一歩をしるしたのも、この浦頭である。四七七名の大半は新京にあつた孤児収容所からの集団引揚者であつた。

昭和二六年（一九五一）発刊になつた（引揚掩護局発行）「佐世保引揚げ掩護局史」満州引き揚げの部に次のことが記されている—。

昭和二十年開局以来、二三年六月までの一般引揚者七五万人のうち最も悲惨であつたのが満州からの



—針尾島・浦頭—

四五万人余の引揚者であった。敗戦の犠牲が如何に大きかったかを如実に語るものである。

持ち帰り荷物はリュック一つで（リュックがあるのは、ましなほう……）所持金もなく着のみ着のまま、彼等自らが乞食部隊と言っていた。敗戦後、奥地から難民が新京へ流れ込んだ数は八万人ともいわれ、越冬時の惨状は目を覆うばかりであったという、各種伝染病、栄養失調で斃れた者は昭和二一年の冬、季節だけで五千とも六千人ともいわれ、難民一千人の収容所で一冬に三百余人が死んでいる。満州全土

において戦勝国人による暴行、殺りく、掠奪とう、その被害は甚大であった。関東軍が少しく毅然たる態度をとっていたなら、この幾多の悲劇はある程度避け得られたかも知れない……と、ある。

昭和六〇年（一九八五）中央公論社より「沈黙の四十年——引揚女性強制中絶の記録——と、題する本が出た。

敗戦直後、博多検疫所で医療業務に携った某産婦人科医師の告発の書である。同書によると引揚入港地に検疫所が設けられ十才以上の婦女子全員の検診を行い、若し強姦とうによる不法妊娠者を発見した場合は強制的に墮胎し胎内の混血児は一人残さず抹殺したと、語っている。

当時、墮胎は刑法二九条で禁止する犯罪であったため、中絶は極秘裡になされた。（墮胎罪が空文化するのは昭和二三年以降となる）この中絶は不法妊娠者のすべてが望んだことではなかった。たとえ不可抗力の許で妊娠させられたとしても、又、父親のわからない混血児を日本内地で育ててゆくことが如何に大変であろうとも、わが児を産みたい——と、願った女達がいたのも又紛れもない事実であったと、しかし彼女達を待っていたのは国家による強制中絶であった。この目的は一体何であったのか、

産む、産まないかを定める女の人権など歯牙にもかけぬ真の狙いはどこにあったのだろうか。外国の性病を水際で防遏するの目的なら男性こそ検診の対象者であつて不思議はない、結局、不法妊娠者は国にとって厄介者であり恥つさらしの存在であつた様だ。日本の女達が強姦された事実を世界の眼から隠し通し、国家としての、一敗れたりとはいへ、その体面だけは保ちたかつたのではないかと、作者は語っている。誰が斯かる重大な指令を出したのか今日も末だ不明という。外地で被害を受けた邦人婦女子は三万とも四万人ともいわれている。佐世保検疫所も「沈黙の四十年」の舞台である博多と同じであつた。

引揚者は上陸直後、頭から全身真白になる程DDTを浴び、その後、女達だけ別棟へ集められ順次一人ずつ呼ばれ不法妊娠の有無とうがただされた。その為の検診台も待っていた。万に一つの僥倖にも似た幸運のカケラだけひろい、かろうじて無疵のまま故国の土をふんだ娘にとって、人の情けも愛も、そのすべてに絶望しタツタ一つ最後に残っていた娘としての衿持がここで粉々になつた。二十才の娘に引率され一緒に日本へ帰ってきた孤兒

達のうち最年長の十三才の少女が身を震わせ肩を寄せてきた。

結 び

昭和二十年十月十四日、濟州島から陸軍軍人九九七人が初めて揚陸し以後二五年四月まで、中国大陸、南方諸島から引揚船一二一六隻で一般邦人、軍人、軍属あわせて一三九万六四六八人が引き揚げの第一歩をふんだ……と。

記念碑に刻まれている。浦頭へ今は訪れる人も稀となり人気がない砂浜にさざ波が静かに寄せていた。市立佐世保図書館で掩護局史を読み進むうちに混沌とした記憶の中から、あの日のどよめきがきこえてくる。私共が引き揚げてきた二一年八月、この一ヶ月間だけで引揚船五六隻により六九、六〇二人が、翌九月には六四隻で七四、一〇五人が佐世保へ上陸している。食料、衣料、あらゆる物資の払底したあの時代、不眠不休で物資の調達にあたり、私共をねぎらい、お世話くださった掩護局の方々のご苦労のほどが局史からうかがい知ることができた。



—平成2年（1990）9月佐世保にて—

しかし引揚婦女検診のことはひとことも言及されてはいなかった。

自分の戦後史に小さなピリオドを打つことができればと……、四四年ぶりで佐世保をたずねた。佐世保は懐しくも、そして悲しみの地でもある。神さびた美しい九十九島のたたずまいは、屈辱の泪とまざりあい一層忘れがたいものとした。今、その島々にはコバルトラインの観光客が賑わい、明るい声が波間にはじけている。

（参考文献）

佐世保掩護局史—佐世保掩護局

沈黙の四十年 —中央公論社

かくされていた京都空襲

—京都府立総合資料館編

戦争の語り部として

—全国戦争傷害者連絡会

満州帝国 —文春文庫

四、回 想

行啓通り 今昔（その二）

佐藤 恒子

「第七号」で、「行啓通り今昔」を書いた後、多くの方々より反響があり、もう少し書いてみようと思う。

「私の育った行啓通りは、現在電線のないスッキリした街に変わった。昔（戦前）は、少し大雨が降ると、坂の上より流れる雨水はドブ板（下水にしてある木の蓋）をブカブカ浮かばせ、それが面白くて我先に飛び出し、長靴の中をビショビショにして遊び廻ったものだ。トイレが水洗でない汲取式の時代である。その後は、ご想像にまかせよう。

我家の職業は、医療器具や自転車の焼付塗装等をする特種な職業であった。エナメルにうるしをまぜ、吉野紙

で、漉したものを、下地をきれいにしたもののへ刷毛で塗る。それを「ふろ」といい埃がつかない様に、大きい戸棚の中に一度納めて、その後焼付けする。

工場には、自転車のフレーム・泥除け等、塗ったものを乾かす大きな乾燥機があり、通称「釜」といった。

「釜」の中は、細い鉄棒がいくつも渡されて乾燥するものによって変えられて行く。雨降りなどで洗濯物が乾かないと、余熱でよく乾かしたものだ。

仕事の都合で、夜遅くまで工場のストーブは焚いていた。寒い冬は、その辺りを求めて、鍛冶村や神山（現在鍛冶町・神山で当時亀田村・昭和四八年函館市と合併）へ帰る馬車追いの人達が、寄ったものだ。街灯の少ない



— 昔 の 行 啓 通 り —

昔、明るい店先は、若い衆のコミュニケーションの場でもあった。通称「馬車追い」というのは、現在の車持ち運転手で、色々な運搬をしていた。大きい馬車は、タイヤ馬車で、主に石炭を運んだ。夏になると現在の市民会館の野原で、「ばんば競争」があり、地盛りした傾斜地を、石を積んだ轆ちりを曳き自分の馬を自慢したものだ。

一服しながら、その日にあった事・仕事・馬の話に花を咲かせ、雪で濡れた衣服を「釜」の前で乾かしながら、母の出すお茶を喜んで飲みほした。

五月〜十月末まで、行啓通りに夜店が出た。近郊で採れたばかりの新鮮な野菜が、花々と共に店に並び、親子づれの買物客をたのませてくれた。ツーンと鼻をつく、カーバイトの匂いは、母の袂たもとを引っばって、買ってもらったセルロイドの人形を想い出す。

ローソクの光で量りの針を見ながら、大きっぱな山盛りで売られる多くの野菜はよく売れた。我家は、角地だったので、店の前はリヤカー、横道は馬車が繋がれた。夜店に出た人のパンクしたリヤカー等、帰宅前に直しておいた。売れ残った野菜も頂いたが、馬が置いて行く土産は、馬糞だった。自転車屋でもないのに、父が面倒見の

好い人だったのでパンクはいつも直していた。戦局が厳しくなつて来て、統制が強くなり、物資が不足して来た。現在、あちこちに放置自転車が目にとまるけれど、その頃、自転車は、貴重品で、自家用車でもあった。自転車のサドルの下の金具に、リヤカーの手をつけると立派な軽トラックになる。

朝早く配達する牛乳屋は、ガチャ、ガチャと瓶の音をたて目覚し時計の様に走る。

八百屋は、リヤカーにつけた大きな竹籠に野菜を入れ積んで走る。雑貨屋・花屋・ガラス屋・帆布にネーム入りのカバーをかけた籠を積んで、ご用聞きする洗たく屋、出前のそば屋、みんな、みんな自転車だった。傷んで来ると器用な父の所に来て直してもらう。チューブは、傷んだ所を切り継ぎ、タイヤは、うすくなった所に切ったタイヤを重ねて直したものである。

自転車は、確かに自家用車に違いはないが、踏んだモーターとガソリンの違いは大きかった。

間口が広く、人の出入りのある我家のガラス戸には、いつも映画館の広告が貼ってあった。お礼に招待券を頂

「あーのネおっさん」の高瀬実や、エノケン・ロッパ、「新妻鏡」「歌行燈」「愛染かつら」等なつかしい。

当時、車と云えば、タクシー・トラック・バスで、燃料は木炭であった。傾斜の強い行啓通りの坂は、一度に登れず、木炭を補充し、勢いをつけてから登るのが毎日であった。背中にタンクをつけ炭俵を背負って走る異様なスタイルのバスを想い出す。

昭和十六年大政翼賛会が生まれた。「一億国民、一致団結、協力」のスローガンのもとに、国民が一人残らず隣保互助の精神を強くしよう」と町会が生まれたのである。

五稜郭町会は、梁川・本・五稜郭町の三町が合併して出来た町会で、全市の町会中最大の町会で、あった。

住民も比較的経済に恵まれた人が多かったたので、町会のまとまりは、好かったという。

父も五稜郭町会の第十一部の運営に当たり隣組の相談役をしていた。国債の割当てが来たり、前回も書いた石炭の配給・飛行場作りなど、小さかった私にも大へんな仕事だったと想い出される。その父も敗戦の十一月二八日、一個のリンゴを食べたいと云い残し西国へ旅立った。やつと息子が復員し安心した父は、五十才で、惜しまれ

て亡くなった。何も好い思いもせず、文明の利器に触らずに逝った父を可哀想に思う。ただ、人の為には、ずい分尽くしたと思う。父からの教え「信用は金銭で買えない」
この教訓を大切に人生を送って行きたい。

小学校時代の記憶の中に、行啓通りには、色々な店屋があつた事を想い出す。

梅宮 いかけ屋

・ いかけ＝鋳掛け 一種の溶接で、るつぼ（金属をとかすのに用いる壺）に溶かした溶金を傷んだ所へ補填する

・ いかけや＝鋳掛屋 鉄・銅等の修理をして歩く旅職人で、昔、天秤棒に、ふいご等道具を下げて旅歩きし、年に、一、二度定まった所を廻り、修理したという。現在は、ほうろうや、アルマイト製品が多くなり、自然この職業は、無くなった。

戦争中、物資不足となり、鍋・釜の修理に、小柄な小父さんは、一生懸命だった。鍋の小さな穴は、ニュームのリベットで直し、大きな穴は、器用に、丸く大きく切ったトタンを当てて修理した。資材のない時代なので、弁当箱や鍋の蓋が材料に充てられた。（蓋は、木製を使用）小父さんの廻りは、いつも鍋・釜や、胴壺（ストーブの後につけ、ストーブの余熱で、お湯をわかす湯わかしの事。当時瞬間湯沸かしが、家庭に普及されておらず湯タンポと同様に貴重な生活必需品であった）の山で、傷んだ所に、チョークで、印がつけられてあり、傘の修理もしてくれた。

だんだん物資が不足して来た。正油が入っていた缶等が、煙筒に変わって行く。切り取ったブリキ（うすい鉄板に錫メッキしたもの）やトタン（うすい鉄板に亜鉛メッキをしたもの）が器用に丸い煙筒に変身して行った。

出征して男手のない家庭へ、小父さんは、ストーブの取付けや、煙筒掃除に歩き、顔をすすだらけにして、走り廻り、いそがしかった。

いかけやで一つ忘れられない事がある。戦後少したって、弟が、私のおさがりのランドセルをどう扱うのか、

週二度程ある給食の食器を割って来るのである。手を焼いた母は、缶詰の缶を切り、いかけやで、手をつけてもらった。熱くて持てないだろうという配慮からである。その缶に、我家の焼付塗装が登場。グリーン色に塗られた缶は、世界に一つのオリジナル。エナメル加工であるから、ツヤツヤと光沢があり、缶詰の缶とは見えない立派な給食カップであった。

石川写真館

行啓通りの中央に、通り一番のハイカラな写場を持つ石川写真館があった。

戦地へ向かう前の駆け込み結婚式もあった。男の人は、戦闘帽に国民服。女の人は、鏝こてで巻いた「サザエさん」スタイルの髪型に造花を一寸差し、着ていたものは、モンの上下というスタイルが多かった。

しかし、写真を撮りに来るお客の大半は、戦地へ赴く出征兵士の若者だった。

そのうちの何人が帰らぬ人となり、黒枠の写真となつ

たであろうか。

共同水栓

田原床屋と五稜郭湯の間に、共同水栓があった。田原さんの小母さんとその裏の奥山さんの小母さんは、とてもきれいな方であった。

夏はさておき、冬は、この共同水栓（通称、鉄管と言ふ）が凍り水が出ない。鉄管の頭の部分を除けて、鉄ピンのお湯をかける。水が出るのを待って近所中の人が、子供から大人までバケツで水を運ぶ。もちろん天秤棒で、バランスを見ながら反動をつけて、運ぶ。子供達は、天秤に紐をからませて短くして運ぶ。そんな中、二人の小母さん方のキビキビした洗いう、洗剤の不足の中、大勢の子供達の洗ひ物が、山程もある。水道の鍵を固定して、勢いよく流れる水の中ビシャビシャと湯気を出しながら洗っていた。パイオという石けんもない時代、家に水道のない主婦の苦闘は計り知れないものがあった。

戦後すぐ外国映画が輸入され、総天然色（カラー）映画に登場した洗たく機に、思わず羨望の眼差しを向けた

ものだった。

現在全自動洗たく機・バイオ（バイオテクノロジー）洗剤が使用され、ボタン一つで洗われる洗たく物は、夢のまた夢であった。

凍てつく外に、筵で囲われた鉄管が、わびしく想い出されるのである。



— 共 同 水 栓 —

五 稜 郭 湯

朝シャンをして、お風呂は我家でという昨今、銭湯が廃業して行くという。当時家庭には据え風呂が少なかった。

行啓通りの中央に大きくて立派な五稜郭湯があった。

配給の粉炭は、火力もなくお風呂屋の斉藤さんの小父さんは、大へんであった。

「小父さん、ぬるいよ!!」

水を少なくし、少しでも熱効率を上げるため、子供の入る浅い所を大きくしたりした。

「小父さん、お湯増やして!!」

小さな窓より小父さんに云う。ジーツと湯につかる事しばし、ようやく熱くなり温まって上がる。

行啓通りの拡張工事が電車通り側と公園側の両方から始まったが、資材不足となり一時中断。お風呂屋が、移転したのは、戦後北洋博（昭和二九年）が、始まる少し前だった。

カチカチと拍子木の音で紙芝居の小父さんが来る。紙

芝居を見る場所も、お風呂屋の裏であった。

石炭を燃料とするので、炭カスが出る。裏に野積みされる炭カス置場は、格好の広場である。高く積まれ、雪が降ると、橇・スキーで滑りたのしかった。

紙芝居で見た、あの大きなエリザベスカラーの「黄金バット」がなつかしく想い出される。

冬など、かくれ鬼をして、冷えた体を、風呂釜の前で暖めて戻ったら、みんな帰ってしまい誰もいなかった。

越田煎べい屋

家の向かい角（現北陸銀行）に、越田煎べい屋があった。店の角に煎べいを焼く所があり、窓は低く、よく外から眺めていた。手拭いで鉢巻をした小父さんが焼く煎べいは、主に「南部煎べい」で、甘いのと、ゴマの多く入ったもの、うすいもの等焼いていた。煉瓦が、二列に並び、渡した煎べいの型は、程よく起きた炭火の上を、右より左へと返されて焼かれて行く。小麦粉のネタが、板の上に置かれ、小母さんが居る時は、細く丸め三センチくらいに切って、切り口にゴマがつけられ、小父さん

に渡される。小母さんが居ない時は、器用に「へら」で少しずつ取って、ゴマをつけ焼いて行く。

「ピュー」っと型よりはみ出して焼ける「ミミ」（煎べいのはじで、焦げたりもしている）のいい匂い。このはみ出した「ミミ」が紙袋に入って売られていた。不揃いの煎べい等、窓から見ている私は、もらって食べた。材料が不足となり、店はしめられた。

子供達の「おやつ」であった煎べいの「ミミ」は、ガキ大将が、子分として従える子供へ分け与える格好の「エサ」でもあった。

三上参省堂薬局

五稜郭公園へ向かう行啓通り入口角に、三上参省堂があった。店は、瀟洒な建物で、中に入るとバルコニー造り、一見何処かの国へ来たのかしらと疑う程、素敵な店構えであった。

今ならちっとも珍しくないが、戦時中の銭湯でのこと、哺乳ビンに入れた果汁や湯ざまし等持参し、湯上がりには幼児に与える小母さんが居た。子供心に、物珍しく眺め

ていた。その人が、三上参省堂の奥様であった。「おしめ」にも継ぎがしてある当時の事、そのハイカラ奥様は、現代の教育ママの走りだったように思われる。

昭和二十三年十一月五稜郭の交差点は、今よりもっと狭く、カーブがきつかった。曲りきれなかった市電が、三上参省堂に飛び込んだ事があった。当時市民の足である市電は、いつも、満員だったので、くたびれていたのでしょう。

「疲労回復剤・栄養剤を下さい」……と。

街は、東部地区へ発展しはじめ、五稜郭の交差点も広くなり、スムーズに電車は流れるようになった。

む す び

道路がよくなる、街が変わって行く。

私達・自分達が育った所が、無くなって行く。

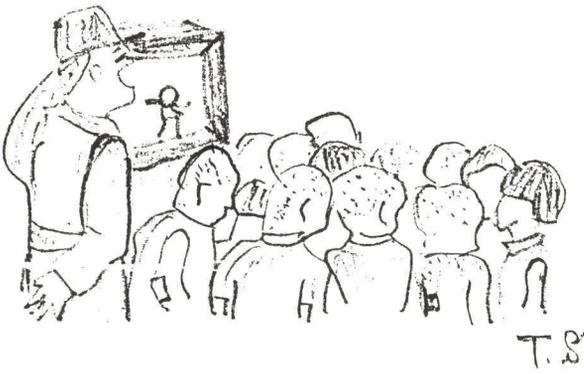
最新のビルが建ち並び、その変貌ぶりを眺めながら、幼い頃遊んだなつかしい店、定時に一勢に電気が灯り、急いで帰宅したあの頃、想いはさらにつのるばかりだ。

街を想い出し、町の風景を組立てて行く過程の中で、遠いあの日あの頃が、忘れかけつゝある中にも、郷愁として想い出される。

道巾が、広くなり、近代文明が入り込み、コミュニケーションが、無くなって行く事が淋しいかぎりである。

(参考資料)

「新編〓函館町物語」 元木省吾



あとがき

あのなつかしい「スッポン・カッポン」は次回へのぼします。記憶をたどる中に、忘れていた事を想い出して一人喜んで居ます。

佐藤 恒子

人の話しを聞くたびに知らない事柄が増えていく。それだけ自分の世界を広げられるとよいのだが。

付け焼き刃の勉強では無理だろうと反省している。

伊原 祐子

ノーマライゼーション（障害者や高齢者が、健常者と共に暮らす社会が、正常であるという考え方）という言葉が、一般化されて久しいが、単なるはやり言葉で終わらせたくない。

作山 すみ子

残留婦人は、現在も数多く中国に居て、まだ、一度も日本に帰っていない人もいます。彼女たちは、皆高齢になっています。政府は、もつと真剣に彼女たちの帰国の手立てを考えるべきだと思います。

大場 小夜子

今回の一文を書かせた動機の一つは某大学教授が論文作成は糊と鋏があれば書けると言っていた、では歴史の記述はどうなのかと問いたかった。二ツめは私が新京で肉親と再会した折、父は哭いたのに何故、私はなけなかつたのか：当時の娘にとり世のおとこは、男である父でさえ疎ましくなってしまう。かたくなで毀れやすい娘の気持ちに父に知ってほしいと思った。家族を守りつづけてきた父は帰国まもなくエネルギーを燃やしつくし四八才で他界した。

田尻 聡子

まず人間の生活があつて、ずっと後に近代国家は生まれたはずなのに……。国家間の取り決めが、人間の意思や行動に優先している。おかしなことに、あらゆる面においてそういうものではないか……。昔かじったルソーの思想を今一度おもしろくしたい。

酒井嘉子

戦争を始める者は、大義や正義を錦の御旗にするけれど、その為に犠牲になるのはいつも庶民だ。しかし、たとえ国と国とが争っていても各々の国の庶民たちが民族や体制の壁を越え心を通わせることもあるのだ。そのことに何か救われる思いがする。

四ッ柳敦子

住所録

伊原祐子 亀田郡七飯町字大川二四〇―三八

大場小夜子 函館市高盛町三一―八

酒井嘉子 函館市高丘町二八―一六

作山すみ子 函館市柏木町八―九

佐藤恒子 函館市中島町一四―一五

田尻聡子 函館市上湯川町一〇―一

船矢美幸 函館市湯川町二丁目五―一〇

四ッ柳敦子 函館市美原五丁目三九―一〇

道南女性史研究 第八号

一九九一年一月三十一日 発行

頒価 五〇〇円

送料 二一〇円

編集と発行 道南女性史研究会

連絡先 042 函館市高丘町二八―一六

酒井嘉子

郵便振替口座 函館四―七〇一六

電話 (〇一三八) 五七―一〇〇五

印刷所 (株)長門出版社 印刷部

函館市日乃出町一―一三

042
道南女性史研究会
28-16

道南女性史研究会

酒井 千代子

